

研 究 報 告 書

研究テーマ

「学校教育目標の実現に向けた教育課程の改善と指導の充実」

～自立活動を主とした教育課程における教科の実践を通して～



平成26年3月

長崎県立長崎特別支援学校

はじめに

厳しい寒さに襲われている日本列島の各地の様子をテレビが連日伝えています。本校の周りにはスイセンの花がよい香りを漂わせながら開き始めました。また、秋に植えたチューリップの球根も土の中から少し芽のぞかし始めました。春に向かって花を咲かせる準備をする頃になりました。

平成25年度も皆様に「研究報告書」をお届けすることができることを大変うれしく思っています。本集録は、子どもたち一人一人の持っている能力や可能性を見だし、最大限に伸ばし、まさに美しい花を咲かせるまでの先生方の実践と研究の過程をまとめたものであります。

さて、特別支援教育制度が始まり7年が経とうとしていますが、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の一層の充実が求められています。インクルーシブ教育システムとは、人間の多様性の尊重等を強化し、障害のある人が、その能力を最大限に発揮させ、社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下で、障害のある人も障害のない人も共に学ぶ仕組みとされています。各種の障害者制度改革も行われ法律等も整い、「障害者の権利に関する条約」の批准も、国会で昨年12月4日に承認され、まもなく国連総長に寄託、そして、効力を生ずることになるかと思えます。文部科学省においても、中央教育審議会に委員会を設置し、障害のある子どもの就学相談・就学先決定の仕組みの見直し、障害の子どもが十分に教育を受けられるための合理的配慮及びその基礎となる環境整備、多様な学びの場の整備と学校間連携の推進、特別支援教育を充実させるための教職員の専門性の向上等々について報告をまとめ、26年度事業予算にも大きく反映されているところです。

このように障害のある子どもの教育の条件整備が図られ、特別支援教育に関わる私たちにとっては、いわば追い風の中で仕事をさせていただく状況にあるのかもしれない。そして、保護者の皆様、県民の皆様の特別支援教育に対する期待と注目も今後ますます高まっていくものと思います。障害のある子どもに、授業を通し、子ども一人一人の能力や可能性を伸ばしていくことを託されているのは、私たち教師です。そのことを粹に感じ、子ども一人一人にとって、必要な教育は何かを探り、よりよい教育課程を創り上げ、実践し、また改善していくこと、本校の先生方は熱心にその研究に取り組んでいます。まだまだ、研究の途上でございますが、御一読いただければ幸いです。

結びに、本研究を進めるに際し、多大な御指導・御助言をいただきました福岡大学 徳永豊先生並びに福岡教育大学 一木薫先生に感謝を申し上げ、はじめの言葉といたします。

平成26年1月15日

校長 峯 信幸

目次

○ はじめに	長崎県立長崎特別支援学校 校長 峯 信幸
I 研究の概要	
1 研究テーマ	1
2 テーマ設定の理由	1
(1) 重度・重複障害教育における教科指導の現状と課題	1
乳幼児の初期発達を踏まえた教科指導	福岡大学 教授 徳永 豊
重度・重複障害教育における教育課程と教科指導	福岡教育大学准教授 一木 薫
(2) 在籍児童生徒について	3
(3) 本校の教科指導の現状と課題	4
3 研究の目的	5
4 研究の組織	5
5 研究の内容及び方法	5
6 研究計画	8
II 研究の実際	
1 1年次(平成24年度)	10
2 2年次(平成25年度)	12
III 研究の成果と課題	
1 研究の成果	46
2 今後の課題	47
○ 補足資料	
○ おわりに	長崎県立長崎特別支援学校 教頭 森 久之
○ 研究同人	

I 研究の概要

1 研究テーマ

「学校教育目標の実現に向けた教育課程の改善と指導の充実」
～自立活動を主とした教育課程における教科の実践を通して～

2 テーマ設定の理由

(1) 重度・重複障害教育における教科指導の現状と課題

乳幼児の初期発達を踏まえた教科指導

福岡大学 徳永 豊

障害が重度で重複している子どもとの授業を展開する際に、子どもの発達に関して大まかな把握が欠かせません。特別支援学校（肢体不自由）では、簡便な発達検査として遠城寺式・乳幼児分析的発達検査等の発達検査を活用する場合があります。それでも、障害の重度な子どもの場合には、発達の初期段階に止まる場合も多く、適切な視点がない状況です。

そこで初期の発達をどう手がかりとするかが課題になります。どのように注意や動きをコントロールしているのか、どのように働き掛ける大人に注意を向け、気づき、受け止めているのかなどです。このことを考える上で、乳児の体験世界に関する研究（スターン、1989）や共同注意関連行動（大神、2008）、さらに近年において急成長している「乳児の発達研究」などが重要になります。これらを手がかりとして、発達段階の意義を構成しました。

さらに、発達検査は「運動」「社会性」「言語」等の区分となっていて、学校の教科の視点での指導とのつながりは検討されていません。授業につながる学習評価に活用するためには、項目の区分を読みかえなければなりません。

これまでは、言語は「聞く」「話す」と対応するものの、「読む」「書く」や「数と計算」「図形」などに該当する項目はない状況でした。そこで、発達段階の意義を踏まえて、乳児の行動を手がかりに、「読む」「書く」等の行動項目を構成しました。

このような経過で「学習到達度チェックリスト」ができあがりました。知的障害がある子どもや肢体不自由に併せて知的障害を有する子どもの学びの状況を把握し、適切な目標設定をするためのツールです。そして長崎特別支学校は、子どもの発達を踏まえながら授業でその活用を模索していて、全国的に貴重な取組です。

子どもの「学び」は、これまでの体験、つまりこれまでの学びに、新たな学びをつなげることで達成されます。その意味では、これまでの学びを把握することが必要です。それが実態把握です。そして、意味ある学びにするのは、それとつながる活動を教員が準備することが大切です。その意味からも「発達」を把握することは不可欠です。

このように子どもの学びを再検討し、適切な「学び」としていくことが求められます。これは、障害の有無に関わらずそうです。障害が厳しい場合には、子どもの健康管理も大切ですが、教員が授業において真に追求していくことは、子ども自身が「学び」を積み上げていくことをいかに支援していくかです。

重度・重複障害教育における教育課程と教科指導

福岡教育大学 一木 薫

教育課程は、各学校が、教育目標を達成するために、教育の内容を授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画です。特別支援学校には、在籍する児童生徒の多様な実態に応じて適切な教育課程を編成することが求められます。そのため、在学期間に、何を、どれだけの時間をかけて指導するのか、教育内容や配当時数を決定する裁量が各学校に委ねられます。その意味からすると、各学校の判断が在籍する児童生徒の学びを大きく左右することになります。

特別支援学校（肢体不自由）では、知的障害等を併せ有する重複障害の子どもに対して、多くの時間を自立活動の指導に替えて教育課程を編成しています。しかし、各教科を自立活動に置き換えた意義や根拠を問われたとき、重複障害者等の教育課程の取扱いを適用した意図を明確に説明できる学校はどれくらいあるのでしょうか。

現在、特別支援学校（肢体不自由）では、自校のこれまでの教育実践を省みて、改めて教科としての指導を見直す動きが出てきています。その中で、教科指導の追究に取り組む先生方が直面する課題が、重度・重複障害のある個々の子どもの実態に応じた目標設定の難しさです。

重度・重複障害のある子どもの場合、その多くは、知的障害者を教育する特別支援学校の各教科（以下、「知的障害の教科」とする）を学びます。知的障害の教科は、各学部（小学部・中学部・高等部）で一つの目標を掲げ、内容に段階を設ける形となっています。これは、多様な子どもの実態を想定したものであり、段階間の幅が大きくなっています。ところが、この幅では、重度・重複障害のある子どもの教科学習における伸びを的確に見極めることができません。知的障害の教科では目標系列の目盛りが大きいため、重度・重複障害のある個々の子どもの実態を適切に把握し、指導目標を設定する指標としては十分ではなく、補完する指標が必要となっています。

そこで注目されるのが、学習到達度チェックリストであり、長崎特別支援学校が取り組まれている、重度・重複障害の子どもに対する知的障害の教科の指導で学習到達度チェックリストを活用した実践です。

学習指導要領は、「生きる力」として「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育むことを重視しています。これらの力の確実な育成は、重度・重複障害のある子どもの教育においても同様に求められます。今後、特別支援学校が、自校の重度・重複障害のある子どもたちに「生きる力」（「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」）を育むための、バランスのとれた教育内容について検討する上で、学習到達度チェックリストが果たす役割は大きいと考えます。

今後、日々の授業でよりよい教育を追究しておられる長崎特別支援学校から、地道な教育実践に基づく研究成果を全国の重度・重複障害教育を担う特別支援学校へ発信していただけることを期待しています。

(2) 在籍児童生徒について

①在籍児童生徒の実態

本校は小学部26名、中学部14名の計40名（訪問教育12名[うち6名が学齢超過者]を含む）が在籍している。重度の知的障害を併せ有する児童生徒が多く、ほとんどが自立活動を主とした教育課程で学んでいる。遠城寺式乳幼児分析的発達検査や学習到達度チェックリストの結果を見ると、多くの児童生徒が6か月未満の発達段階にあり、在学中にあまり変化が見られない児童生徒が多いことがわかる。

以前は隣接する長崎病院みどり棟からの通学生が大半を占めていたが、近年は自宅からの通学生が増加しており、独歩の可能な児童生徒、簡単な指示理解のできる児童生徒、医療的な配慮をさほど必要としない児童生徒など、実態が多様化してきている。

②保護者の要望、願い

在学する児童生徒の個別の教育支援計画によると、保護者は、「歩けるようになってほしい」「立つようになってほしい」、「座れるようになってほしい」などの身体の動きに関する願い、「定時排泄ができるようになってほしい」、「家族と同じものを食べるようになってほしい」、「衣服の着脱ができるようになってほしい」などの日常生活のスキルに関する願い、「言葉や身振りでやりとりができるようになってほしい」、「要求を伝えてほしい」などのコミュニケーションに関する願いを子どもたちへ抱いていることがわかる。また、特に中学部では、「自分の時間を過ごせるように楽しみを見つけてほしい」など、余暇（趣味や活動）に関する願いが多くなる。これは、卒業後も充実した生活を送ってほしいという保護者の気持ちの現れであると考えられる。先に述べたように実態は様々であるが、このような保護者（本人）が抱く願いを把握し、個別の指導計画に反映させていくことが大切であると考えられる。

③卒業後の進路の実態

本校には高等部がないため、ほとんどの児童生徒が鶴南特別支援学校高等部訪問教育または諫早特別支援学校高等部のどちらかへ進学をしている。保護者は「中学部卒業後も引き続き教育を受けさせたい」「高等部へ進学し、学校で人と関わりながら過ごしてほしい」と望む気持ちが強い。しかし、通学距離の問題、体力面の問題などにより、鶴南特別支援学校訪問教育を選択し、授業のない日はデイサービスを利用する、または家庭で過ごすなどしながら卒業後の生活を送る生徒が多い。

特別支援学校卒業生の「生活の履歴および実態」調査（安藤、一木 2011）によると、高等部卒業後は医療施設等への入所や在宅にてデイサービス等を利用しながら過ごす卒業生が多いとの結果が出ている。また、デイサービスのない日の家庭での活動は、ほとんどが「テレビ」に集約されており、卒業後の生活の幅が広いとは言えないことがわかる。このことから、在学中に何を身につけておかなければならないか、どのような力が必要なのかを探ることは大事なことであると考えられる。卒業後の生活の充実につなげるために必要な指導内容をいかに教育課程に盛り込み、実践していくのが課題である。

(3) 本校の教科指導の現状と課題

①教科等を合わせた指導から教科としての指導へ

学習指導要領の改訂に伴い、平成21年度から3年間をかけて、全校研究と教育課程委員会を連動させながら、教育課程の構造や指導形態の見直しなど、教育課程の改善に取り組んできた。その中で、それまでの教育課程にあった「集団学習（自立活動を中心に教科等を合わせた指導形態）」に焦点を当てて指導内容の整理等を行ったところ、知的障害者を教育する特別支援学校の各教科（以下、「知的障害の各教科」とする）である「音楽」、「図画工作・美術」、「体育・保健体育」の指導内容を多く含んでいたことがわかった。そこで、研究初年度の平成21年度に、まず「集団学習」が「何の教科もしくは領域を合わせているのか」を洗い出したうえで、指導内容の分析・整理を行った。そして、指導形態として設定の可能性を見出していた上述の3教科に指導内容を振り分ける研究に取り組んだ。同時に、自立活動との関連についても検討し、教科と自立活動を関連させて指導するための研究を行った。また、「音楽」、「図画工作・美術」、「体育・保健体育」は、児童生徒の興味関心を広げやすく情操を育むことができるであろう、将来の余暇活動につながるであろうという仮説を立て、教科として設定することとした。

平成22年度からは、教育課程に上述の3教科を設定し、授業実践に取り組むとともに、授業作りの指針とするための指導内容表（補足資料1）を作成した。その中には、①学習指導要領にある知的障害の各教科の目標、②各単元の目標、③関連する自立活動の内容、④評価規準等を示すこととした。

2年間の成果としては、教科ごとに児童生徒の変容を細かに把握できるようになり、次なる授業改善につながったことや指導すべき内容が精選されたことで児童生徒にとってもわかりやすく、授業内容に見通しがもちやすくなったことなどが挙げられた。

②教科としての学習評価の課題

平成22年から23年にかけての研究では、自立活動との関連を押さえながら知的障害の各教科「音楽」、「図画工作・美術」、「体育・保健体育」の学習指導要領に示してある内容の1段階や2段階を選択して授業を行ってきた。しかし、自立活動を主とした教育課程で学ぶ児童生徒の指導においては、その内容の各段階間の幅が広いため、より個に応じた目標設定や評価をすることの難しさが課題として挙げられた。特に、上述の指導内容表に記載する④評価規準を個々に設定する際に道しるべとなるべき目標や内容の更なる分析・研究の必要性が課題として残った。

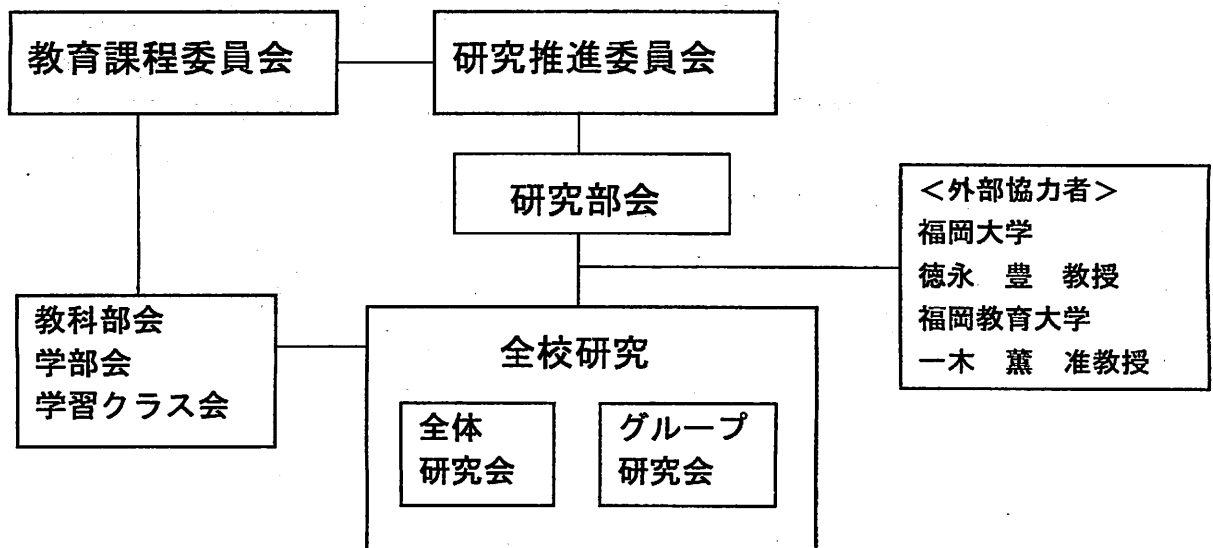
3 研究の目的

テーマ設定の理由で述べたように、重度重複障害のある子どもに教科指導を行う場合、知的障害の教科では個々の目標を設定するのが難しく、子どもの学びを的確に把握することが難しいこと、また、個々の子どもの学習評価を教育課程改善につなげていくのが難しいということが課題として挙げられる。このような課題は、全ての特別支援学校（肢体不自由）の抱える共通の課題とも言えるだろう。

そこで、平成24年度、25年度は以下の3点を目的として本研究を進め、研究テーマの実現を目指すことにした。

- ① 「めざす児童生徒像」の実現に必要な学校としての「身につけてほしい力」を検討し、どのような子どもに育てたいかを明らかにした上で「身につけてほしい力」を踏まえた授業実践を行い、学校教育目標を実現できる教育課程の編成を目指す。
- ② 学習到達度チェックリスト（徳永、2006）を教科の目標や手だての設定、評価をする際に活用する学校としての共通のツールとし、教科指導の充実を図る。
- ③ ①②を踏まえた個々の教師の授業実践の評価を集積し、教育課程改善の検討資料に生かす。

4 研究の組織



5 研究の内容及び方法

(1) 1年次（平成24年度）

- ① 学校として「身につけてほしい力」を踏まえた授業の在り方の検討
 - ・「めざす児童生徒像」の実現に必要な学校として「身につけてほしい力」の整理
 - ・「身につけてほしい力」を踏まえた事例研究
 - ・「身につけてほしい力」の個別の指導計画の書式への位置づけ
- ② 「学習到達度チェックリスト」の活用（補足資料2）
 - ・「学習到達度チェックリスト」についての研修会
 - ・教科指導における「学習到達度チェックリスト」による実態把握と授業実践
 - ・「学習到達度チェックリスト」の音楽版の作成（子どもの発達段階の理解）

(2) 2年次(平成25年度)

個々の教師の授業実践の評価を集積し、教育課程改善の検討資料に生かす取組

以下個々の教師の授業実践に関わることを<個>、教育課程編成に関わることを<全>と示し、それらの実践のサイクルを以下のように表現することとした。

【知る】・・・実態把握

【描く】・・・目標設定

【挑む】・・・実践

【省みる】・・・評価

①<個>：個々の教師の授業実践について

i) 学習到達度チェックリスト(音楽版)を用いて音楽の指導目標及び手だての設定を行う。

<個>の【知る】【描く】は以下のプロセスで取り組む。

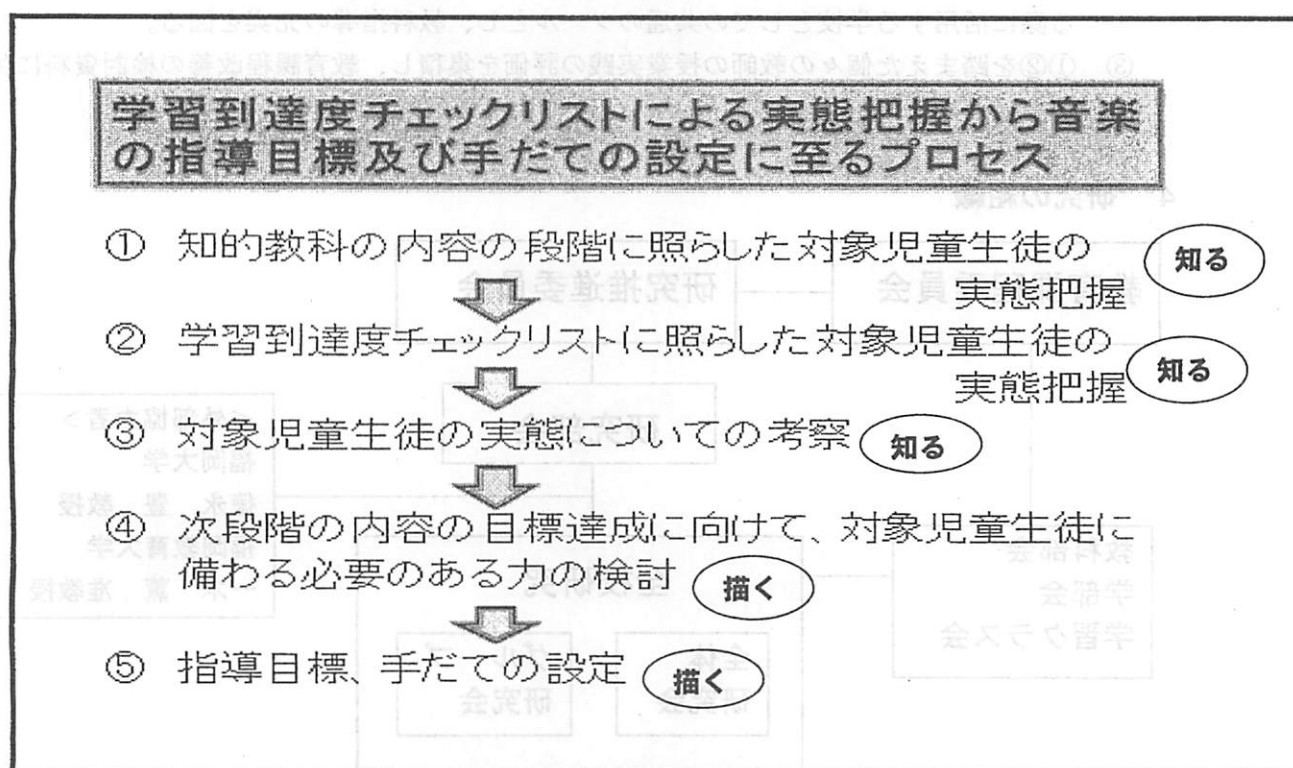


図1 学習到達度チェックリストによる実態把握から音楽の指導目標及び手だての設定に至るプロセス

ii) <個>の指導の充実に向けて月1回グループ研究会を実施する。

担当する児童生徒の学習到達度チェックリストのスコア(月齢)を考慮しながらグループに分かれて研究する。

Aグループ：スコア1～2 Bグループ：スコア2～4

Cグループ：スコア4～8 Dグループ：スコア12～36

Eグループ：訪問教育

iii) 各グループ事例対象児童生徒を1名挙げ、図1に示したプロセスで目標や手だての設定を行い、設定した目標や手だての妥当性についてグループで協議をする。

iv) 全体研究会で授業研究やまたは事例検討を行い、目標や手だてについて適切であったか、授業後の評価を踏まえ、協議を行う。

※その際に出てきた授業や教育課程における課題は、随時<全>へ反映させる。

②<全>：教育課程編成について

i) 年間計画の作成 (補足資料3)

全校研究、各教師の日々の教育活動、教育課程編成に関わる校務分掌(主に教務部、自立活動部)の業務分担を整理したスケジュールを立てることにした。その際、以下のことに留意した。

- ・ 日々の教師の活動と研究部、教務部、自立活動部の動きを関連させる。日々の教師の教育活動に生かすために、何をどのタイミングで実施するのかを検討して計画を立てる。
- ・ 学部会、教科部会、学習クラス会で話題に上がった教育課程上の課題は、随時教育課程委員会や全校研究でも話題にする。
- ・ <個>の学習評価を集積したり、教師にアンケートを実施したりして、次年度の教育課程編成に向けた資料を集約する。

ii) <個>：個々の教師の授業実践と<全>教育課程編成のつながり

<個>個々の教師の授業実践の集積を<全>教育課程編成につなげる取組を以下の流れで実施し、<全>につなぐ。

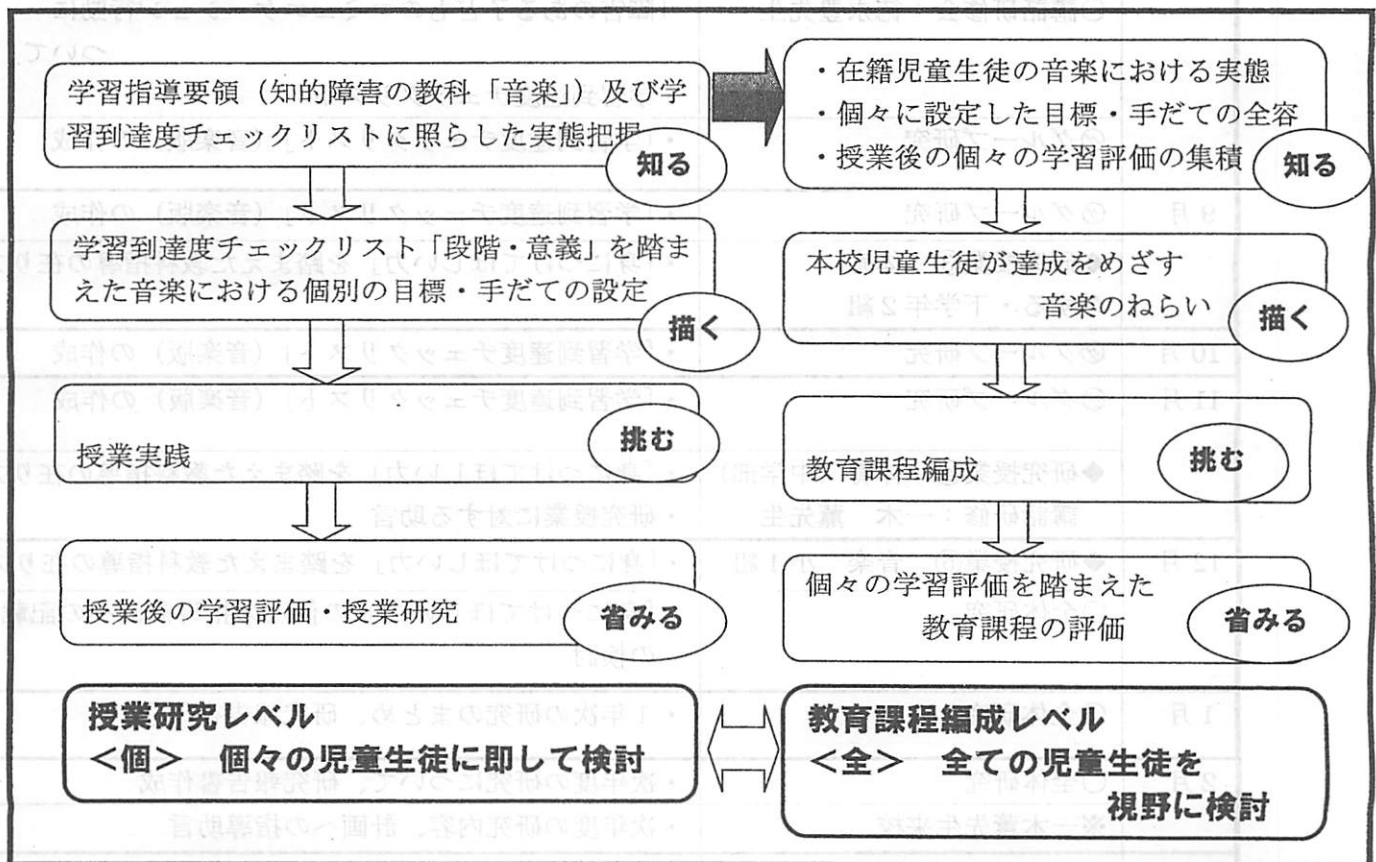


図2 <個>の授業実践を<全>の教育課程に改善につなぐプロセス

6 研究計画

(1) 1年次 ○：全体研究 ㊦：グループ研究 ◆：研究授業

月	研究関連の会議等	内容
4月	研究推進委員会	・24年度、25年度の研究について 研究内容、方法の検討
5月	※一木薫先生来校	・今年度の研究内容及び方法についての指導助言
	○全体研究	・今年度の研究について 確認、共通理解
6月	○全体研究	・「身につけてほしい力一覧」の見直し
7月	◆研究授業① 音楽 (小学部5組)	・「身につけてほしい力」を踏まえた教科指導の在り方
	○全体研究	・「身につけてほしい力と授業の関連図」作成 ・1学期研究の振り返り
	○講話研修会：一木薫先生	「1学期の取組を踏まえ今後を描く」
8月	◆研究授業② 生活学習 (訪問教育部)	・「身につけてほしい力」を踏まえた教科指導の在り方
	○講話研修会：徳永豊先生	「障害のある子どものコミュニケーション行動に ついて」 ・学習到達度チェックリスト
	㊦グループ研究	・「学習到達度チェックリスト」(音楽版)の作成
9月	㊦グループ研究	・「学習到達度チェックリスト」(音楽版)の作成
	◆研究授業③ 体育 準ずる・下学年2組	・「身につけてほしい力」を踏まえた教科指導の在り方
10月	㊦グループ研究	・「学習到達度チェックリスト」(音楽版)の作成
11月	㊦グループ研究	・「学習到達度チェックリスト」(音楽版)の作成
	◆研究授業④ 体育(中学部) 講話研修：一木 薫先生	・「身につけてほしい力」を踏まえた教科指導の在り方 ・研究授業に対する助言
12月	◆研究授業⑤ 音楽 小1組	・「身につけてほしい力」を踏まえた教科指導の在り方
	○全体研究	・「身につけてほしい力」の個別の指導計画への記載例 の検討
1月	○全体研究	・1年次の研究のまとめ、研究報告書作成
2月	○全体研究	・次年度の研究について、研究報告書作成
	※一木薫先生来校	・次年度の研究内容、計画への指導助言
3月	○研究推進委員会	・次年度の研究について

(2) 2年次 ○：全体研究 ㊦：グループ研究 ◆：研究授業 ☆：教科部会

月	研究関連の会議等	内容
4月	研究推進委員会	・今年度の研究について 研究内容、研究計画等
5月	○全体研究	・今年度の研究についての共通理解 「身につけてほしい力」、学習到達度チェックリストについて
	㊦グループ研究	・個別の指導計画の教科の目標設定と評価 音楽の目標設定及び手だての検討
6月	㊦グループ研究	・個別の指導計画の教科の目標設定と評価 音楽の目標設定及び手だての検討
7月	◆研究授業① 音楽 (小4組)	・Cグループ (小学部4組) ・音楽の目標設定や手だて、評価について (音楽科学習到達度チェックリストを活用して)
	○全体研究 講話研修会：一木薫先生	・Aグループ事例研究発表 「1学期の取組の成果と今後の課題」
	㊦グループ研究	・個別の指導計画の教科の目標設定と評価 音楽の目標設定及び手だての検討
8月	☆教科部会①	・1学期の授業の振り返り、成果と課題
	講話研修会：徳永豊先生	「『学習到達度チェックリスト』について」 ・概要と実践事例についての検討
	㊦グループ研究	・個別の指導計画の教科の目標設定と評価 音楽の目標設定及び手だての検討
9月	◆研究授業② 音楽 (中学部)	・Bグループ (中学部) ・音楽の目標設定や手だて、評価について (音楽科学習到達度チェックリストを活用して)
	㊦グループ研究	・個別の指導計画の教科の目標設定と評価 音楽の目標設定及び手だての検討
10月	○全体研究	・Eグループ (訪問教育) 事例研究発表
11月	○全体研究	・Dグループ事例研究発表
12月	㊦グループ研究	・研究の反省と今後に向けて
	☆教科部会②	・教育課程編成に向けて 教材配列、系統性の確認
1月	㊦グループ研究	・研究の反省と今後に向けて・研究報告書作成
	※一木薫先生来校	・次年度の研究内容、計画への指導助言
2月	○全体研究	・研究のまとめ、研究報告書作成
3月	○研究推進委員会	・次年度の研究についての提案
	○全体研究	

Ⅱ 研究の実際

1 1年次（平成24年度）

（1）学校としての「身につけてほしい力」を踏まえた授業の在り方の検討

①「身につけてほしい力」の整理

平成22年度に掲げた「身につけてほしい力」を再度見直し、下記のように4つのカテゴリーに整理した。

<長崎特別支援学校の児童生徒に「身につけてほしい力」>

楽しみ	見たり聴いたりする力、興味関心をひろげていく力、新しい環境を受け入れる力、余暇を楽しむ力
人とかかわり	意思を表出する力、選択する力、他者を理解する力、手段を活用する力
健康・からだ	健康である力・姿勢を保つ力・運動・動作を高める力、挑戦する力
社会参加	身近な大人とかかわる力、友達とかかわる力、社会に参加する力、役割を果たす力

②『身につけてほしい力』と授業作りの関連図」の作成（補足資料4）

①で整理した身につけてほしい力が、学習指導要領や個別の指導計画とどのように関連するのか、また整理した「身につけてほしい力」を踏まえてどのように授業の目標を設定するのかなどを明らかにするために、図式化し、教科等の授業における目標設定の在り方について確認した。

③個別の指導計画への記載例の作成（補足資料5）

①②の手順を踏み、25年度の個別の指導計画から、「3年後までに『身につけてほしい力』」を記載することにした。個々に「身につけてほしい力」の導き方を以下のように示した。

- i) 児童生徒の実態、本人の願い、保護者の願いなどを把握する。
- ii) 児童生徒に長崎特別支援学校での9年間でどんな力をつけてほしいのか、中学部卒業後、あるいは高等部卒業後にどのような生活をして過ごすのかをイメージしつつ、「児童生徒が将来豊かな生活を過ごすための学校教育とはどのようなものか」「卒業までにどれだけの力をつける必要があるのか」を考える。
- iii) 『身につけてほしい力』と授業の関連図」を参考にしながら、「3年後までに『身につけてほしい力』」を記載する。

児童生徒の人間としての調和のとれた育成を目指すことは学校教育の原則であることを押さえ、4つのカテゴリーの中から、1～2個選んで記載することを確認した。

（2）教科の目標設定と評価について

①「学習到達度チェックリスト」の活用について

以下のプロセスを踏みながら「学習到達度チェックリスト」を授業に活用するようにした。

<24年度5月>

- ・自立活動研修会にて、「学習到達度チェックリスト」の概要を紹介した。
- ・学習グループごとに分かれ、児童生徒一人一人についてチェックをつけた。チェックをする際に迷った部分は、グループで確認しあうようにし、できるだけ複数の教師でチェックするように配慮した。

< 8月 >

- ・福岡大学徳永豊先生を招聘し、研修会を実施した。

研修会内容：「学習到達度チェックリスト」の「段階・意義」について

本校児童生徒に対しての「学習到達度チェックリスト」の活用事例の検討
学習到達度チェックリスト（音楽版）作成に向けての指導助言

< 6月～12月 >

- ・各学習グループの研究授業の際、「学習到達度チェックリスト」の結果と分析をもとにした授業の目標設定や手だての在り方について検討した。
- ・「学習到達度チェックリスト」に示された「段階・意義」を参考に、本校独自の「学習到達度チェックリスト（音楽版）」を作成した。

②「学習到達度チェックリスト（音楽版）」の作成について（補足資料6）

< 8月～11月 >

音楽の内容の4つの観点（歌唱、身体表現、器楽、鑑賞）ごとに全教師をグループ分けし、以下の手順で作成した。

- i) 担当する児童生徒の音楽の授業で見せる行動を挙げ、以下の4つの観点到振り分ける。
 - 歌唱・・・発声に関すること
 - 身体表現・・・身体（全体）の動きに関すること
 - 器楽・・・上肢の操作に関すること
 - 鑑賞・・・音や音楽を聴いたときの反応、音や曲調の聞きわけなどへの反応、態度に関すること
- ii) 振り分けた行動をスコアの段階・意義と照らし合わせて配列をする。
- iii) イギリスの「Pスケール」(*)や先行研究等を活用し精度を上げる。

※「改訂版達成目標を設定する上での支援；Supporting the Target Setting Progress (revised Marth 2001) ; Guidance for effective target setting for special educational needs」(2001)

イギリスのナショナルカリキュラムのレベル1以下（小学校1年生以下）の子どもの目標達成をどのように設定するかのガイドライン

2 2年次（平成25年度）

(1) <個>：個々の教師の授業実践について

- ①P7図2に示したサイクルで、A～Eグループで取り組んだ。
- ②音楽の授業の目標と手だては、図3に示す「音楽の目標及び手だてシート」に記載することにした。
- ③グループ研究では、以下のシートをもとに各グループで個々の児童生徒の音楽の目標と手だてについて協議を行った。

音楽 個別の指導計画の目標と手だて 学部 _____ 年 _____ 名前： _____

そのスコアであると判断した行動。これが、音楽における実態把握であり、重要な情報になる。

スコアの数値とその段階・意味

観点	スコア	段階・意味	スコアの根拠となる行動	目標となる行動	個別の指導計画の目標
歌唱	12	発語、言葉への応答、相互的なやりとり	・知っている歌のフレーズを教師と1フレーズずつ交互に歌うことができる。	・少しだけだが、大人と声を合わせて歌う。	①教師の声に合わせて、自ら身体を動かしたり簡単なフレーズを歌ったりすることができる。
身体表現	12	とりの拡大、ジェスチャーで選択	・歌に合わせての難しいが知っている歌を聞いて、手を上に上げたり手を合わせたりする。	・歌を聞いて身体の一部だけを合わせて動かす。	
器楽	12	姿勢の保持・変換、手指の巧緻性	・ばちを持たせるとランダムに太鼓を叩いたり、タンバリンを自分なりのリズムで叩いたりする。	・曲を聞きながら楽器を鳴らす ・様々な楽器に応じた鳴らし方がわかる。	②音楽の始めと終わりを認識して、打楽器を演奏することができる。
鑑賞	18	意味の理解と共有、自己主張・拒否の芽生え、見立て活動の芽生え、言語指示への応答	・CDやラジカセを見せて曲を聴こうと誘うと教師に注目する	・特定の楽器の音を聞き分ける	

次に目標となる行動（クリアしたセル上の行動、△がついた行動など）をチェックリストに記載している行動から抜粋する

段階・意義を解釈し、児童生徒に対する手だてを記載する。

目標達成への手だて（段階・意義をふまえて設定する）

- ①・曲を覚える際の学習活動では、CDや伴奏に合わせて教師の歌声を聴かせるようにする。
- ・歌唱を促す場面では、CD等は使わず教師の歌声のみで行う。まず教師が歌い出し、歌に気づかせる。歌い出したら、教師が対象児の声に合わせて合わせるようにする。
- ・全部一緒に歌うことができたなら、対象児と視線を合わせ、言葉と拍手で称賛する。
- ②・容易な操作で音が出る打楽器を扱う ・教師の歌声に合わせて楽器を演奏する。・曲が終わったら、演奏する手を軽く止める。
- ・対象児が楽器を演奏する前に声かけとジェスチャーで教師に注目させてから始める。

図3 「音楽の目標及び手だてシート」

《A グループ実践事例》

事例対象児童 小学部4年 女子

【知る】1 学びの履歴 (小学部1年～3年)

	目標	内容	手だて (手)・配慮 (配)
1 年 生	<p>A：音や音楽に合わせて身体を動かしたり、リズムを打ったりする。 (身体表現)</p> <p>B：扱いやすい打楽器などいろいろな音を出して楽しむ。 (器楽)</p> <p>C：身近な人の歌や演奏などを聴き、いろいろな曲に関心をもつ。 (鑑賞)</p> <p>D：友だちや教師と一緒に音楽あそびを楽しむ。 (歌あそび)</p>	<p>①音楽に合わせて体を動かす。</p> <p>②打楽器を中心にいろいろな楽器の音を聴き、音を出してみる。</p> <p>③楽器を使って自由に合奏をして楽しむ。</p> <p>④いろいろな曲を鑑賞する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の援助で音や音楽に合わせて身体の一部、または全身を使って動かす。(手) AD ・教師の援助で友だちや教師とふれあいながら音楽遊びをする。(手) AD ・体調に合わせて姿勢を工夫する。(配) AD ・触れる、ばちでたたく、振ったりこすったりして楽器の音を出し聞く。(手) BD ・楽器の音を出しやすい姿勢や楽器の位置を工夫する。(配) BD ・教師と一緒に楽器の音を出し、合奏する。(手) B ・右手の動きがあるときは、その動きに合わせて援助する。(配) B ・季節にちなんだ曲を鑑賞する。(手) C ・ヘッドホンで聴く。(手) C ・ゆっくりした姿勢で静かな雰囲気の中で鑑賞させる。(配) C
2 年 生	<p>音がする方向や楽器・歌声の違いに気づき、音の方を向いたり表情で表したりできる。</p>	<p>①音楽に合わせて体を動かす。</p> <p>②いろいろな楽器を使って、教師と一緒に音を鳴らす。</p> <p>③いろいろな曲や楽器の音色を聴く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・身体表現では、曲のリズム感を感じられるように曲に合わせて身体を動かす。(手) ・楽器の音色や曲の様子をしっかり受け止められるように、本人の表出を見ながらゆっくり題材とかかわらせる。(手) ・音を鳴らす活動では、自分で音を鳴らす実感を得られるように、手の動きを引き出す身体的なかかわりや、鳴らした音を受け止めているかを表情等から見ながらゆっくり楽器とかかわるようにする。(手) ・生活年齢に配慮しながら、さまざまな楽曲にふれることができるようにする。(配)
3 年 生	同上	<p>①いろいろな曲、歌声、楽器の音色を聴く。</p> <p>②いろいろな楽器を教師と一緒に鳴らす。</p> <p>③音楽に合わせて身体を動かす、タッピングを受ける、移動する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・曲が終わった後はしばらく待ち、本人の表出を見るようにする。 ・身体表現では、曲のテンポやリズム感を感じられるように、それらに合わせた身体の動かし方やはっきりしたタッピング等を行う。 ・楽器を鳴らす活動では、(手や身体を)動かす→音が鳴る、の関連が分かりやすいように、鳴らし方の工夫をする。

2 実態把握

(1) 学習指導要領知的障害の教科（音楽）の内容の段階に照らした実態把握

1 段階

①音楽が流れている中で身体を動かして楽しむ。

②音の出るおもちゃで遊んだり、扱いやすい打楽器などでいろいろな音を鳴らしたりして楽しむ。

2 段階

①好きな音や音楽を聴いて楽しむ。

(2) 「学習到達度チェックリスト（音楽版）」に照らした実態把握

①うたう（スコア1）

気管切開をしているため声は出せないが、歌や音楽が聴こえると、目をきょろきょろさせ（視力は光を感じる程度）、何の音かを感じるような表情を見せたり、聴き慣れてくると笑顔を見せたり、口を何度も開けながら歌うようなしぐさを見せたりすることがある。（声が出せないためにスコア2以上のチェックはつけることができない。）

②音に合わせてうごく（スコア1）

まだ意図的とはいえませんが、右手を上げ下げする動きがある。姿勢によっては頭をかすかに動かすことはあるが、座位保持いすではほとんど見られず、頭部保持はまだ難しい状況である。表情は歌唱と同じ。必ずしも音に起因した動きとまではいかない。

③かなでる（スコア1）

普段から右手を軽く握っている。意図的ではないが右手をゆっくり上げ下げする動きがある。（身体表現と同じ）また、音源を探すように目をきょろきょろさせることがある。（スコア2になると「～を見る」「～視線を向ける」など本児の実態では難しいチェック項目になっている。）

④聞く・聴く（スコア2）

歌や音楽が聴こえると、目をきょろきょろさせ（視力は光を感じる程度）、何の音かを感じるような表情を見せたり、聴き慣れてくると笑顔を見せたり、口を何度も開けながら歌うようなしぐさを見せたりすることがある。（歌唱と同じ）また、学校ではまだ見られていないが、太鼓の演奏を聴いたときに肩を揺らして笑っていたとのこと。音による振動を感じやすいのではないかと思われる。

<実態についての考察>

全体的に見るとスコア1～2となる。しかし、対象児はスコア1の段階・意義である『反射的に行動する』というより、よく聴いたことのある声には笑顔が出やすいなど、聴こえる音や声を聴いてその違いに気づき反応をすることが期待できる段階（スコア2）であると推測される。ただし、学習に向かうまでの状態が不安定で、1学期に1時間中目を覚まして学習できたことは1回しかない。7割は寝ているか、起きていても痰が上がってきて呼吸が不安定になり、活動が思うようにできていない（音刺激をきちんと受容することができない状態）。途中で起きても10分も続かないことが多いなど、対象児の実態として信頼性があるのか、判断が非常に難しい。

【描く】

1 音楽の年間目標

<4年生>

音がする方向や楽曲・楽器・歌声の違いなどに気づき、音源の方を向いたり表情で表したりすることができる。（手の動きによる楽器の操作も期待できるものの、まだ音楽の中で目標とする段階

ではないと判断し、今年度は手だての段階にとどめることとした。)

2 手だて・配慮

①うたう・聴くについて

- ・聴く活動では、曲が終わった後にしばらく待ち、本人の表出を待つ。(手)
- ・音の響きを感じさせるために、音源に直接触れさせるなどの工夫をする。(手)

②かなでるについて

- ・楽器を鳴らす活動では、(手や身体を)動かす→音が鳴る、の関連が分かりやすいように、鳴らし方の工夫をする。(手)
- ・右手を少し上げ下げする動きや軽く握る動きを生かして、楽器を鳴らす経験を増やす。(配)

③音に合わせて動くについて

- ・曲のテンポやリズム感を感じられるように、それらに合わせた身体の動かし方やはっきりしたタッピングなどを行う。(手)

<全体的な配慮>

- ・覚醒レベルが低いときには、姿勢を変えるなどして覚醒レベルを高めるようにする。

【挑む】

1 授業の実際

(1) 題材名：曲の気分を感じて(ゆりかごのうた、威風堂々、ラバースコンチェルト)

(2) 題材の目標

- ①教師の歌声を聴き、目の動きや笑顔などの、表情で聴いた感じを表現する。
- ②教師と一緒に楽器を鳴らし、音に気付くことができる。

(3) 手だて・配慮

*【描く】2 手だて・配慮に同じ

2 本時の学習評価

6月21日

目標①に対して：身体に触れられて数回目を開けるものの、覚醒レベルが高まらず音を聴き取ることが難しかった。

目標②に対して：覚醒レベルが高まらず、反応を評価できなかった。

6月28日

目標①に対して：威風堂々の曲が聴こえると、目を左右に動かし、口を聴いたり閉じたりする動きが増えた。曲が終わったとき笑顔になった。(曲の終わりを感じたのかは不明)

目標②に対して：変化なし

【省みる】

1 授業研究会(事例発表会)記録

- このスコアの児童生徒の場合、確かに毎年同じ目標になってしまい評価も難しく感じるだろう。持っている力はあるが、その時間に明らかな反応が見られなかった場合確固とした評価ができないということに共感する。しかし、ビデオを観た限り、対象児の聴く力は明らかについていると思う。音楽としての力が蓄積できていのではないかと思う。

○覚醒レベルが低く評価がしにくいかもしれないが、起きているところでの評価を蓄積しながら確実にしていくことが大切なのではないか。伸びが緩やかな児童生徒の場合、1年間～3年間というスパンでしっかり学びにつなげていくという視点も要ると思う。

2 1年間を振り返って

(1) 児童（生徒）の変容

- ・1学期同様、しっかり覚醒しているときは、教師の歌声やトーンチャイム、鉄琴、エレキギターなどの楽器音が聴こえると目を大きく開き、次にきょろきょろ動かしてじっと聴き入るような表情や笑顔を見せた。覚醒のレベルが低いときは、音が聴こえた瞬間はぱっと目を開くもののまた目を閉じてしまった。眠りが深いと和太鼓の音やスピーカーから流れる大きな音、揺れや振動を与えても反応しなかった。
- ・楽器演奏はベルチャイムに取り組み、「1、2の3」で挙げた手を教師が離すと音が鳴るようにしてみた。覚醒していると目をきょろきょろさせて「あれ？」という表情が見られたが、覚醒レベルが低いと全く反応が見られなかった。
- ・覚醒レベルを高めるためにも、曲に合わせて振動や揺れを与えるようにしたが、覚醒レベルを高めることにつなげることが難しかった。結果的に2学期を通じてしっかり覚醒していたことがほとんどなく、1学期からの変容は見られていない。

(2) 学習評価に対する教師の意識の変容

①覚醒の状態と評価（目標設定）について

対象児は、体調がよく覚醒していれば音に対する反応が顕著な形で見られることが多い。しかし、周りからの刺激をしっかり受け止められるほど覚醒していることが極端に少ないうえ、覚醒していても排痰や吸引が必要な状態であることも多い。その結果、評価できる反応の積み重ねがなかなかできず、毎年同じ目標になってしまうという状況を招いている。わずかに起きていた時間での反応を学習の成果として捉える（評価する）ことは、その力はあるであろうと推測はされても信頼性は十分とは言えない。

本校の音楽のねらいは、『音楽に合わせて身体を動かしたり、いろいろな楽器に関わったり、音楽を聴いたりする活動を通して、好きな音や音楽を見つけ（＝将来にわたって楽しめるような音楽との出会いをすること、いろいろなジャンルの音楽に触れ、興味関心を広げること）、その楽しさや美しさ、心地よさを味わうようにする。』としている。このことから、毎年同じ目標になってしまっている場合、当該学年で学習する曲を題材にすることによって、好きな音や音楽が広がり、横への発達を促すことができると考える。この場合、目標の書き方について、今後工夫が必要になってくると思われる。

②自立活動と音楽の評価の違いについて

発達段階が初期の児童に対して、「音に気付く」という目標設定をした場合、音楽の歌遊びの中では、音に反応したのか身体を動かしたことに反応したのかの評価がしにくい。どちらに反応したかの視点をもち評価することも大切だが、あくまで音楽では、その両方を含めた関わりの中で「音に気付く」ことが重要であるから、細かい評価は自立活動の中で行っていくというすみ分けができるとよいのではないかと考える。

③評価方法について

数回にわたりビデオに撮ることにより、音楽的な関わりの中での一瞬の表情やわずかな変化など細かに見直すことができてよかった。特に重度の障害がある児童生徒の場合、このような

方法も必要であると感じた。

3 グループのまとめと今後の課題

本グループは、スコア1～2の実態の児童生徒のグループで、ほぼ全員が事例対象児童と同様に学校生活の中で眠っていることが多い、起きていても覚醒レベルが低いなど、学習の基盤となる部分に課題を抱えている。しかし、このような児童生徒に対して教科としての学びをどう考えるかということグループ全員で協議をし合えたことに、大変意義があった。本グループでは、以下の点について意見を出し合い協議を深めた。

○段階・意義の理解について

スコア2が示す段階・意義「外界への注意の焦点化と探索」について検討した。本グループに在籍する児童生徒の多くは「注意の焦点化」はできていると思われる。しかし、障害の程度が重いために「探索」をするなどの視線の動きや表情の表出が難しいということが考えられる。その段階・意義であることを踏まえ、関わる教師は「〇〇くんの注意の表出手段はこうだね」と共有し、音や音楽に対する表出の読み取りをすることが大切であることを再確認し、授業に臨むことができた。

○手だてについて

スコア1「外界の刺激や活動への遭遇」スコア2「外界への注意の焦点化と探索」の段階意義と児童生徒の実態を踏まえ、音楽の授業では以下のような手だてが有効であることを確認した。

- ・鑑音や音楽に気づきやすくするために、部屋を暗くする、身体接触をせずに音のみを鳴らす。
- ・自発的な動きが難しい児童生徒にとっては、ただ聴くだけでなく、教師と一緒に実際に楽器に触れたり、抱っこしてもらい教師と一緒に揺れたりすることでより音楽に気づきやすくなる。

○評価について

- ・眠っているときや音に気付かないときの評価に迷うことがあるが、その他の学校生活の時間において音や音楽に対する反応を音楽として評価してよいのではないか。
- ・週1時間の音楽の授業では、本当に児童生徒が学んだことなのか、たまたまの表出なのか判断しづらい。
- ・なかなか表出が難しい児童生徒の場合、音楽に合わせて動く学習をした際に、音楽に反応したのか動きに反応したのかという視点をもって評価していくことが大切である。

○教科と自立活動について

- ・スコア1～2の実態の児童生徒の場合、音楽の目標を「音（楽曲、楽器、歌声）に気づいて音源の方を向いたり表情で表したりする」などを設定することが多く、一見、自立活動の目標なのか音楽の目標なのか迷ってしまうこともあるだろう。しかし、発達が初期の段階にある児童生徒については、自立活動で学ぶべきことを押さえた上で、音楽としての目標設定や評価をしていくべきである。

○音楽と「身につけてほしい力」との関連

- ・学校生活を通して、教師や友達と一緒に音楽を楽しむ学習を共有しあうことが大切である。そのような学習を通して、自分の好きな音や音楽を見つけたり、自分で音を出す喜びを感じたりしてほしいと考える。

将来的には、自宅でまたは生活介護事業所などで自分の好きな音や音楽を聴く楽しみを持ってほしい。児童生徒自身から「この曲が好き」と発信することは難しいので、私たち教師は学習評価をしっかりと蓄積し、保護者や進路先へ情報として伝えることも念頭に置きながら日々の指導を行う必要があると思う。

＜Bグループ実践事例＞

事例対象生徒 中3年 男子

【知る】

1 学びの履歴（小学部6年～中学部3年1学期）

＜うたう＞

- ・クラシックや唱歌など関心のある曲には、歌うような発声や曲の終りに優しい声で「アー」と声を出す。
- ・近くから歌いかけると、それに応じるように「アー」と声を出すことがある。

＜音に合わせてうごく＞

- ・曲調が変化したり、曲が中断したりすると、目を動かしたり手に力が入ったりする。
- ・速いテンポで軽く身体にタッチされると、穏やかな表情になる。ゆっくりしたテンポに合わせて身体に触れられると不快な表情を見せる。
- ・好きな曲に合わせて、身体に力を入れずに教師と一緒に動くことができる。

＜かなでる＞

- ・近くで音を鳴らすと、音の方向に視線を向けることができる。
- ・木琴、鉄琴、カスタネット、マラカスなどの楽器の音を教師と一緒に出すときは、リラックスしてリズム打ちを楽しむことができる。
- ・鍵盤楽器に教師と一緒に触れて音を鳴らすとき、自分で手に力を入れて鳴らすことがある。
- ・教師と一緒にバチを握って和太鼓をたたくときは、大きな音や振動に対して、身体に過度な緊張を入れることはない。
- ・カバサの音に対して、機嫌の良い声を出し、笑顔を見せる。
- ・メタルフォンやトーンチャイムを教師と一緒に鳴らすと、閉じていた目を開けたり、穏やかな表情を見せたりする。
- ・レインスティックの音に、じっと耳を傾けている様子が見られる。

＜聞く・聴く＞

- ・にぎやかな曲よりは静かな曲を好む。クラシックや唱歌などの関心のある曲には、じっと聴き入る様子や笑顔、発声、目を大きく開ける、上体が伸び上がるといった様子が見られる。
- ※好みの曲名
「おぼろ月夜」「もみじ」「ふるさと」「冬景色」「スキー」「歌よありがとう」「ドナドナ」「魔王」「蝶々婦人」「千羽鶴」「赤とんぼ」「HEY JYDE」「運命」「カノン」「ヨーデル」
- ・曲調が変わると、変化に気づき声を出す。※ビバルディの「四季」
- ・合唱曲の盛り上がる部分で笑顔を見せることが多い。
※曲目「ラバースコンチェルト」「カントリーロード」
- ・CDから曲を流すだけでなく、布で風を起こす、布で音を出すなどして曲の雰囲気を作ると、笑顔がより多く見られる。
- ・ゲストティーチャー（純心大学の学生）の歌声を近くで聴いて、笑顔を見せる。
- ・関心が薄く好みではない曲には、硬い表情を見せたり、目を閉じたりする。
- ・耳慣れない曲（ロック、レゲエ）には、不思議そうな表情を見せる。
- ・邦楽「春の海」を聴くと、琴の音色に笑顔を見せる。

2 実態把握

(1) 学習指導要領知的障害の教科の内容の段階

- 身近な人の歌や演奏などを聴き、いろいろな音楽に関心をもつ。(小学部3段階)
- 打楽器などを使ってリズム遊びや簡単な合奏をする。(小学部2段階)

(2) 学習到達度チェックリストに照らした実態把握

音楽の学習履歴(小学部6年～中学部3年1学期まで)をもとに、学習到達度チェックリストの4つの観点別に評価を整理したものが以下の表である。

観点	うたう	音に合わせてうごく	かなでる	聞く・聴く
スコア	2	2	2	2

「スコア2」の段階・意義

外界の変化に反射的に行動する段階を過ぎて、外界の変化に気づきが生じ、外界の変化や活動に興味を示す段階。外界を探索するようになり、「見ること」「聞くこと」等が行動として芽生え、成り立ち始める。「この音は何だろうか」と注意を集中させ、探るような表情をすることが特徴。物を注視する、わずかに追視するなどの行動がある。

<うたう>

- ・「スコア2」の段階ではあるが、「スコア6」にある『周囲からの働きかけに対して、自分の感情を「アー」という発声で伝える「やりとり」』は見られていると思われる。言語機能的に喃語等の出現を本児に期待することは難しいが。本児は、周囲からの働きかけに応じて「アー」という発声で応じたり、自分の様々な感情を表出したりすることができる。また、学習の繰り返しによって、次を期待し落ち着いた態度で「アー」と声を出して応じる様子が見られる。さらに、本児が好きな歌では歌うように声を出したり、発声があったりしたことから、「スコア4」「スコア6」に向かう発達が見られる。

<かなでる>

- ・「スコア2」のチェック項目「楽器など音源のある方向に顔や視線を向ける」ことはできる。しかし、視覚機能的に見ることに難しさがあるため、2つの項目「目の前の太鼓や木琴を見る」「楽器を差し出すとそれを見る」項目をクリアできない。よって、「スコア2」はクリアできていないこととなる。しかし、段階・意義を踏まえ、項目の内容を「目の前の楽器の音を出す、または、楽器に触れるとそれに気づく」と代替すると「○」となり、「スコア2」の段階はクリアしていると思えることができる。
- ・「スコア4」に「教師の援助を受け入れて楽器に触れる」という項目があるが、その楽器の種類が増えている。

<聞く・聴く>

- ・いろいろなジャンルの曲を鑑賞することによって、聞き始めの頃は「快」の反応はなかったが、繰り返し聞くことによって、身体をリラックスさせて笑顔で鑑賞できる曲目が確実に増えてきている。
- ・CDを流すだけでなく、直接、五感に訴える手立てを加味すると、表情の表出がより確かなものになる。
- ・「快」の感情で受け入れられる曲やリズム、テンポに広がりが見られるようになると、身近な大人と一緒に身体を動かすことを受け入れる曲も広がりを見せている。「聞く・聴く」力の発達が

「音に合わせてうごく」発達を促していることがわかる。

○本児の実態

本児は聴く力があり、環境の変化に敏感で音や人の存在を感じる力がある。鑑賞曲の途中で曲調が変化することに気づく力や、唱歌やクラシックなど普遍的な音楽性豊かな曲に心を魅かれる感受性を持っている。感じたことを発声や表情、身体の動きで表出することができる。学習の積み重ねによって、好む曲のジャンルにも広がりが見られ、いろいろなリズムテンポを受容する力が育ってきている。

【描く】

1 音楽の年間目標

- ① いろいろな楽曲を聴くことで音楽経験を広げ、表情や発声、身体の動きで感じたことを表現することができる。
- ② 歌の一部分で声を出す（歌う）ことができる。
- ③ 教師の援助を受けながら、楽器に触れたり握ったりして音を鳴らし、友だちと一緒に演奏する楽しさを感じることができる。

2 手だて

①について

- ・ いろいろなジャンルの曲を鑑賞させる。
- ・ 鑑賞のときは、楽曲に集中できるように、部屋を暗くする。
- ・ 曲のリズムに合わせて身体を揺らすなどして、身体全体でリズムを感じられるようにする。
- ・ 歌唱曲の鑑賞では、歌の世界や雰囲気、季節感を醸し出し、五感に訴えられるような環境作りに努める。

②について

- ・ 歌唱では、発声を期待する部分に適切な楽器の音を入れたり、間をおいたりする。

③について

- ・ 楽器は、わずかな手の動きでも音を鳴らせるようなものにする。
- ・ 教師と一緒に音を鳴らすときは、リズム感や曲調を感じられるようにする。
- ・ 友だちと一緒に簡単な演奏をするときは、一人でまたは教師の援助を受けて音を出し、演奏する部分など役割を持たせる。
- ・ 器楽の曲は簡単な構成にし、始まりと終わりがわかりやすいように工夫する。

【挑む】

1 授業の実際

(1) 題材名

単元名 日本の音楽を味わおう

題材名 「おはやし（長崎くんち演し物「鯨の潮吹き」のお囃子のアレンジ）」（器楽）

「でんでらりゅうば」（歌唱）

「ふるさと」（鑑賞）

(2) 本時の目標

○ 「おはやし」のリズムを感じ取り、教師と一緒に音を鳴らす。

○ 友だちや教師と息を合わせて、「おはやし」の演奏を楽しむ。

○ 教師の歌いかけに声を出して応じたり、「でんでらりゅうば」の歌詞の一部分を歌ったりする（「アー」と声を出す）。

(3) 展開

学習活動	目標達成のための手だて及び配慮事項	準備物
<p>○始めのあいさつ</p> <p>○「ふるさと」の鑑賞</p> <p>○本時の学習を知る</p> <p>○リズム遊び</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ T1が一定のリズムで手をたたき、近くから呼びかける。教師の呼びかけに対して「アー」という本児の発声を待つ。 	<p>カセットデッキ</p> <p>スピーカー</p> <p>CD</p>
<p>○おはやし (MD) の鑑賞</p> <p>○お囃子の演奏。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師と一緒にカスタネットの音を鳴らす。 ・ 友だちの音を聴く。 ・ 友だちと一緒に音を鳴らす。 <p>㊦ Adagio 程度の速さで ゆっくりと</p> <p>㊧ Adagio 程度の速さで陽気に</p> <p>○「でんでらりゅうば」を歌う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 覚醒レベルが低いときは、リズムに合わせて足を動かす。 ・ MDは長崎くんち「鯨の潮吹き」の本物のおはやしの音を録音したものを使用する。 ・ T1が締め太鼓をたたいて呼名する。 ・ T1の呼びかけに合わせて、T2は、本児の片手に手を添え、本児の動きに合わせて音を鳴らす。もう一方の手は、カスタネットの柄の上に置き、本児が音の振動を感じられるようにする。表情の変化や発声があった場合は、T2が本児の心情に寄り添った言葉を返す。 ・ 他の生徒が担当する楽器を、耳元で一つずつ鳴らして聴かせ、注意を喚起する。 ・ T1は、演奏の始まりの合図として笛を吹く。 ・ ㊦の速さで演奏するときは、「ヨーッシーリヨーイサー」のかけ声と共に太鼓の音が聞こえたら、T2は本児と一緒にカスタネットを鳴らす。 ・ ㊧の速さで演奏するときは、「ヨーッシーリヨーイサー」のかけ声の後に、T2は本児と一緒に、「トントトントン」とカスタネットを鳴らす。 ・ T1が笛を吹いて終わりを告げる。全員で声を合わせて「せーの」と発声したら、最後に各自の楽器の音を1回鳴らす。なるべく、みんなの音を合わせて終わるようにする。 ・ T1が鈴を振りながら歌い、曲のテンポを感じられるようにする。 ・ 歌の最後の歌詞「こーんこん」の部分では、T1がクラベスを鳴らして近くから歌いかける。 	<p>MD</p> <p>和太鼓</p> <p>和太鼓の台座</p> <p>締め太鼓</p> <p>締め太鼓の台座</p> <p>ボンゴ (2)</p> <p>ハンドドラム</p> <p>カスタネット</p> <p>鈴</p> <p>笛</p> <p>クラベス</p> <p>鈴</p>
<p>○学習のまとめ</p> <p>○終わりのあいさつ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 良かったところやがんばったところを伝え、称賛する。 ・ 学習発表会に向けて、おはやしの練習を続けることを伝える。 	

2 本時の学習評価

- 教師が締太鼓を「トントントントントン」とたたいて名前を呼びかけると、表情が引き締まり、身体に適度な緊張を入れて教師と一緒にカスタネットを鳴らしたり、「アー」と声を出したりすることができた。
- 「トントントントントン」のゆっくりしたテンポで、友だちが太鼓を鳴らした後にカスタネットを鳴らす役割を持たせた。カスタネットを鳴らすときに、「アー」と声を出すことがあった。
- おはやしの演奏の最後に、「せーの」とみんなで声を合わせて各自の楽器を一打するとき、その音が合うと声を出して笑うことが数回あった。最後にみんなの音が一つになる心地よさを感じ取ることができたと思う。
- 「でんでりゅうば」の歌の一部分を「コーンコン」と、クラベスを鳴らして歌いかけると「アー」と声を出すことが数回あった。

【省みる】

1 授業研究会（事例発表会）記録

- ・チェックリストと学びの履歴を踏まえた目標設定ができていた。チェックリストに○がつかない子どもに学びの履歴から項目を上げ、その視点に沿って目標設定するのはよかった。学びの履歴をチェックリストに活用することで、次ほどの段階なのわかりやすかった。また、「横への広がり」を見るツールとして日々の授業作りに生かしていくことができると考える。学びの履歴を踏まえて目標設定のプロセスを文章化したことで、次年度につながるのではないかな。
- ・目標を設定する際、学習指導要領の音楽の内容の段階の選定について指摘があり、中3の対象生徒に対してどの段階を選択することが適切であるか協議した。

2 1年間を振り返って

(1) 生徒の変容

<うたう>

- ・短い曲で親しみやすい題材（わらべ歌など）を取り上げ、「この歌のこの部分で発声を促したい」という部分を工夫（簡単なフレーズに、その雰囲気合った楽器の音を添えて歌いかけるなど）することで、発声があったり、歌声に耳を傾けたりする様子が見られた。
- ・授業のはじめに、すぐ近くから「トントントントン」と座位保持椅子の机を軽くたたいて呼びかけることを繰り返すうちに、「アー」と声を出して応じるが増えた。

<かなでる>

- ・中学校の器楽の教科書から選定した曲を、簡単な構成（A-B-A）に、短め（3分間程度の長さ）に再構成し、教師や友だちと一緒に音を出すところ（A）と音を聴くところ（B）を設けることで、生徒が見通しをもつことができた。その結果、次にどんな部分がくるかが期待でき、表情の表出が増えた。
- ・響きのある楽器（トーンチャイム、メタルフォン）の音色が聴こえると、目を開けたり、笑顔を見せたりすることが多いことから、それらを使って演奏する曲を学期に1つは取り入れるようにした。響きのある音を使った器楽では必ず笑顔が見られた。
- ・2学期に取り組んだ「長崎くんち：鯨の潮吹きのおはやし」は、単純なリズムの繰り返しとテンポの変化で構成されている。おはやしの演奏では、教師が締太鼓をたたきながら呼びかけると、それに応じるように「アー」と声を出して、教師と一緒にカスタネットを鳴らすことができた。また、演奏の終わりは、みんなで「せーの」と声を合わせた後、各自の楽器を一打するようにしたところ、最後にみんなの音が鳴って終わる心地よさを感じてか、声を出して笑うことが数回見られた。

- ・足下にタンバリンを置き、足がタンバリンに触れると音が鳴るようにしておくと、覚醒レベルが低いときでも目を開け、足下から伝わってくるタンバリンの振動を感じている様子が見られた。

<聞く・聴く>

- ・情景を歌った曲は、CDから曲を流すだけでなく、鳥が羽ばたく音を布で起こしたり（「翼をください」）、波の音をオーシャンドラムで鳴らしたり（「そこに風がいる」）というように、直接、五感に訴える手段を加味したことで、快の表情や発声が多くあった。
- ・合唱曲では、中学3年時に学習する混声4部合唱曲のCDに、終始笑顔を見せた。合唱曲が2部構成よりも3部構成、4部構成と重なるにつれて、快の表出が顕著に見られた。

(2) 学習評価に対する教師の意識の変容 (P25 別表①参照)

学習の履歴（評価）を、4つの観点（「うたう」「音に合わせてうごく」「かなでる」「聞く・聴く」）別に整理し、音楽科学習到達度チェックリストと照合する作業をすることで、本児の発達の段階と実態が把握でき、今後期待される姿をイメージすることができた。しかし、発達の段階に適した具体的アプローチの方法については、「音楽」という教科の基本的、専門的知識の習得に努め、研鑽を積む必要があることを痛感した。

3 グループのまとめと今後の課題

本グループは、運動・動作面に関する実態は様々であるが、スコアは、2～6程度の実態の児童生徒のグループである。ほぼ同程度のスコアの事例を出し合い、授業を行うことで、音楽科の授業の捉えや授業づくりにて手応えがあったと考える。

本グループでは、以下の点について意見を出し合い協議を深めた。

○段階・意義の理解、音楽の学習到達度チェックリストの活用について

- ・学習到達度チェックリストというツールを活用することで、各発達段階の児童生徒に応じた授業づくりにおいて大切なことを知ることができ、今後の授業づくりの参考になった。
- ・児童生徒一人一人の実態把握の手がかりになった。その際、チェック項目をそのまま目標や指導内容にするのではなく、児童生徒に応じた段階・意義をいかに読み取るかが重要になると考える。このような考え方で利用すれば、次の指導のステップが適切に読み取れるのではないか。
- ・学習到達度チェック項目を見ただけでは、具体的な子どもの姿は見えにくく、課題も出しにくいという意見が多かった。しかし、学習の履歴を四つの観点ごとに整理したところ、段階・意義にある行動や音楽に対する様々な感受性をより理解できやすくなり、スコアの項目が意味することを再度検討して実態把握や目標設定を捉えることができた。

○手だてについて

- ・授業の際、今まで以上に他の児童生徒の段階・意義を意識して目標や手立てを設定し、一人一人の指導にあたることができた。
- ・スコア2「外界への注意の焦点化と探索、自発運動」スコア4「注意の持続、物の単純な操作、自体の操作など」スコア6の「やりとりの予測、パターン化など」の段階・意義を踏まえ、身体面の実態に合わせて、以下のような手だてを考えた。
 - ・器楽については、わずかな手の動きでも音を鳴らせるようなものを工夫する。
 - ・曲は簡単な構成にし、始まりと終わりがわかりやすいように工夫する。
 - ・鑑賞のときは、楽曲に集中できるように部屋を暗くする。五感に訴えられるような環境作りをする。曲のリズムに合わせて身体を揺らすなどして、身体全体でリズムを感じられるようにする。

○評価について

- ・その段階ができる、できないだけで評価するのではなく、その項目の内容どのように横に広が

り、深まっているかを見ることが大切である。また、同じスコアでも内容の広がりによってそれぞれの子どもによって異なる。それらの事柄をじっくり捉えていく過程も重要である。

- ・機能的に見ることが難しい児童生徒の場合、視覚を使うチェック項目の■が将来△や○になる可能性は低い。しかし、他の力と代替して捉えることで、できたと評価してもよいものもあると考える。

○音楽と「身につけてほしい力」との関連

- ・教師が児童生徒の姿を把握し、「このようにしたら楽しめる」という具体的な方法や様子を進路先のデイサービス等にしっかり伝えることで、児童生徒が、将来余暇をより楽しむことができるようになるのではないかと考える。

8	音声や身振りによる働きかけ、物を介したやりとりの芽生え、活動と結果の理解、探索的操作	<p>わらべ歌「でんでらりゅうば」の「コンコン」の部分でクラスで音を鳴らして歌う学習を繰り返すと、「アー」の発声があった (中3)</p>			<p>□特定の曲の一部を覚え、好きな歌では笑顔になる □好きな楽器の音に耳を傾けて聴く トーンチャイム、メタルフォン □曲や楽器などの音が鳴ると気づく</p>
6	やりとりの予測、パターン化、★学習による行動変化、音声や表情の模倣、注意の追従、物のやや複雑な操作、状況に合わせた自体の操作	<p>×大人の真似をしてアウーと声を出す</p> <p>・「もみじ」「ふるさと」「冬景色」の曲では、歌うように発声することがあった</p> <p>・「スキーの歌」を聴き終えた後に、優しい声で「アー」と声に出し、歌うような様子が見られた (小6)。</p> <p>「テキーラ」の発声場面で周りの声かけを聞いて「アー」と叫ぶことができた (中1)。</p> <p>・「千羽鶴」の曲が流れると、快の声を出すことがある (中1)。</p> <p>・速さに変化をつけながら、「甲斐陸基トントン」と、すぐ近くから歌いかけると「アー」と声を出すことがある。</p> <p>×喃語が頻繁に出る</p> <p>×「マンマンマン」のように反復する鼻にかかったような声を出す</p>	<p>■気に入った音楽が流れたときに、手をたたく</p> <p>×身近な大人と一緒に興味を示した音の音源を探そうとする</p> <p>■音に合わせて、全身で動く、寝返りをする</p> <p>お嬢子の演奏の終わりの部分は、「せーの」のかけ声の後、楽器を一打して終わることがわかり (期待感もある)、声を出して笑った。みんなで息を合わせる空気を感じ取っている。友だちと息を合わせる (一緒に音を出す) 心地よさを感じ取ることができた。</p>	<p>■楽器を見て、手を伸ばす</p> <p>・鍵盤楽器に教師が手を触れさせると、自分で押す方向に力を入れて鳴らすことができる (中1)。</p> <p>・キーボードの上に教師が手を置いてやると、わずかに手を動かして音を出し、その音に気づいたように、はっとした表情を見せる。</p> <p>×楽器を少しの間は持っている</p> <p>■両手で物をつかむ 「威風堂々」</p> <p>「トランペット協奏曲」 →曲の盛り上がり部分で笑顔が見られ、上体がぐつと伸びる。 「ふるさと」は、3部より4部合唱が笑顔が多い。</p>	<p>△好きな曲と嫌いな曲がある</p> <p>○好きな曲がありリラックスして耳を傾ける</p> <p>「おぼろ月夜」「もみじ」「ふるさと」「冬景色」「スキー」「歌よありがとう」「赤とんぼ」「Hey Jude」、ヨーデルの歌声や伴奏の弦楽器、「星の世界」、「蝶々夫人」「街は光の中に」「カノン」「春の海」歌唱曲「ラバズコンチェルト」「翼をください」「カントリーロード」、合唱曲「カントリーロード」、ベートーベン「運命」「ほたる来い」「そこに風がいる」</p> <p>△繰り返し聴いた曲であれば、次を期待する。</p> <p>◇曲調の変化などに気づくことができる。</p> <p>・ビバルディ「四季」後半の曲調の変化に気づき声を出す。</p> <p>・「魔王」のセリフの部分で目を大きく開く。</p>
4	他者への注意と反応、発声、注意の持続 物の単純な操作、自体への操作	<p>△親しい人やおもちゃなどに向かって声を出す</p> <p>△好きな音を聞くと声を出す</p> <p>○模倣のよいときに、アー、オー、ウーと声を出す (母音)</p>	<p>■気に入った音楽が流れたとき前後や左右に身体を揺らす</p> <p>△音の出る方向に顔を向けようとする。</p> <p>△身近な大人と一緒に身体を動かすことを受け入れる</p> <p>・「ヘッド ショルダー ニーズ & トー」速いリズムでソフトタッチの受け入れが良い。</p> <p>・「ロックソーラン」緊張を入れずに教師と一緒に手を動かしたり回ったりする。</p>	<p>■音の出るおもちゃを好んで持ったり触れたりする</p> <p>△少しの間であれば触ったり、握ったりする</p> <p>○援助を受け入れ楽器に触れる</p> <p>木琴、鉄琴、カスタネット、マラカス 和太鼓のバチ、ベルハーモニー、カバサ ※教師と一緒にリズム打ちを楽しむことができる。</p>	<p>○好きな音があり、その音が聴こえると笑顔になる</p> <p>箱型鉄琴、和太鼓、ピアノ、尺八、箏 ビバルディ「四季」のバイオリンの音色 トーンチャイム、レインスティック</p> <p>○心地よい音と不快な音に反応する</p> <p>△特定の歌にはよく耳を傾けている</p> <p>「千羽鶴」</p>
2	外界への注意の焦点化と探索、自発運動	<p>○声を出して笑う</p> <p>○むずがるような泣き方をする</p> <p>○「アッ、アッ」「エッ、エッ」「アウー」などの声を出す</p>	<p>○手をわずかに動かす</p> <p>○手足を動かす</p> <p>○頭を動かす</p>	<p>■目の前の太鼓や木琴を見る</p> <p>■楽器を差し出すとそれを見る</p> <p>○楽器など音源のある方向に顔や視線を向ける</p>	<p>○歌や音楽を聴くと目を開いたり、表情を変えたりする</p> <p>○近くで鳴らした楽器の音や歌に反応する</p>
スコア	段階、意義	うたう	音に合わせてうごく	かなでる	聞く・聴く

《Cグループ実践事例》

事例対象児童（生徒） 小学部3年 男子

【知る】

1 学びの履歴（小学部1年～2年）

歌唱	身体表現	器楽	鑑賞
<ul style="list-style-type: none"> ・曲を聴きながら一緒に歌う様子はまだ見られないが、授業以外の時間に口ずさんでいることはよくあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽は好きで、聴こえると動きを止める、笑顔になる、首を振るなど、よく耳を傾けている様子が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「どんぐりさんのおうち」では、リズムに合わせて部分的に太鼓をたたくことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・元気な明るい曲調が好みのように笑顔が見られたが、部屋が暗くなり歌も静かな曲調になると机にうつ伏せることが多かった。

（小学部2年）

歌唱	身体表現	器楽	鑑賞
<ul style="list-style-type: none"> ・明るくテンポの速い曲が好きで、初めて聴く曲でも気に入ったフレーズを口ずさむことがあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくりした曲では、初めは机に顔を伏せて興味を示さなかったが、学習を繰り返していくうちに、曲に合わせて手拍子をするようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな楽器に興味を示し、楽器の音が聴こえるとすぐに手を伸ばして触ろうとしていた。 ・曲が鳴り始めると聴き入ってしまうので、歌に合わせて鳴らすことは難しいが、音を鳴らそうとぼちを持ち替えたりたたく場所を変えたりするなど自分で工夫している様子が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「トルコ行進曲」では、曲の終わりで音が小さくなっていくのに気づき、終わりが近づくと笑顔になったり机に伏せていた顔を上げたりしていた。 ・クラシック曲でも机に顔を伏せて眠そうにすることが少なくなり、いろいろな曲をよく聴くようになった。

2 実態把握

〈1〉 内容の段階に照らした対象児の実態	〈2〉 学習到達度チェックリストに照らした対象児の実態 ① スコア ② 「段階・意義」をふまえて把握した実態	〈3〉 対象児の実態についての考察	〈4〉 2段階に向けて、まず、どんな力が備わる必要があるのか
<p>■歌唱 ジャンルを問わず音楽には興味があり、好きな曲を部分的によく口ずさむ。短い曲なら最後まで歌うことができる。</p> <p>■身体表現 曲を聴くと手拍子をしたり身体を左右に揺らしたりする。</p> <p>■器楽</p>	<p>① 歌唱：8 身体表現：8 器楽：12 鑑賞：8</p> <p>② 概ねスコア8「音声や身ぶりによる働きかけ」の時期であり、発音は主に母音であるが、自分で好きな歌を歌ったり、教師が歌っている歌をまねると、教師の手を取りもって歌うように要求したりする。</p> <p>・好きな曲であれば、曲のリズムやテンポに合わせて身体を揺らしたり手をたたいたりすること</p>	<p>〈学習到達度チェックリストに照らした実態の考察〉 自分が好きな音楽を聞いたり自分のリズムで表現したりすることに関心をもっている。しかし、他者からの働きかけへの気づきが見られ始め、コミュニケーションの始発の芽生えが見られる段階で、自分の中だけの音楽活動にとどまっていることが多い</p>	<p>〈第2段階の内容〉 好きな音楽や歌などを聴いたり歌ったりすること、児童の自発的な動きに教師がリズムや音楽を合わせることを通して児童が音楽活動を楽しむ段階の内容。 2段階相当の目標を達成するために必要な力として、 ・自分で歌ったり聴いたりすることを楽しむことがで</p>

<p>楽器には興味を示し、音が聞こえるとすぐに手を伸ばすことが多い。たたいて音を出そうとすることが多く、マラカスなどもたたいて音を出そうとする。</p> <p>■鑑賞 曲や楽器の音が聞こえると、喜んで身体を左右に振る、手拍子をする、動きを止めてじっと聴き入るといった様子が見られる。</p>	<p>ができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・器楽では「探索的操作」の段階から、手指の巧緻性が高まってくる段階。ぱちを持たせると自分なりの持ち方だがたたいて音を出すことができる。また、たたくところを変えながら、音が出る方向を探し、笛などをくわえてなんとか音を出そうとするなど試行錯誤する様子も見られる。しかし、様々な楽器に応じた鳴らし方や曲を聴きながら鳴らすことは難しく、自分の中だけで音を鳴らすことを楽しんでいる。 ・鑑賞では、曲や楽器の音への気づきがあり、好きな曲が聞こえてくると喜んだり曲を覚えて一部分を歌ったりすることがある。 	<p>い。それゆえ音楽や他者に合わせるにはまだ難しい段階である。器楽に関しては、音が鳴ることを楽しんでいる段階で、楽器に応じた鳴らし方や音楽を聴きながら鳴らすことはまだ難しいと考える。</p> <p><学習指導要領の内容の段階に照らした実態の考察></p> <p>第1段階の自分の中で「楽しむ」ことはできている。</p> <p>第2段階の「友達や教師とともに」や「打楽器などを使ってリズム遊びや簡単な合奏」という人や曲に合わせて音楽を表現することは難しい。</p>	<p>きる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者の働きかけに気づく。 ・他者と共に活動することを受け入れ、それを楽しむことができる。 <p>などがあると考ええる。</p> <p>スコア8という段階が結果として出ているが、本児の外界との関わりを考えると、物への関わりはある程度見られるが他者との関わりについては芽生えが見られる段階である。スコア6～スコア8へと段階が上がる指標の「自らの活動による外界からの意味の抽出」という力の外界(人)との関わりが本児にはまだ十分であるとは言えないと考える。本児は見るのが難しいこともあり、自分の中だけの音楽活動でとどまりがちになってしまう。</p>
---	---	--	---

【描く】

1 音楽の年間目標

- ① 教師の歌をまねして、簡単なフレーズを歌うことができる。
- ② 特定の曲に合わせて、教師と手と手を合わせることができる。
- ③ 曲が鳴っている中で自由に音を出し、曲の終わりには教師の援助に応じて演奏を止めることができる。

2 手だて

① の目標について

- ・範唱では、教師の歌声を聴かせるようにする。
- ・本児が歌ったら、教師がまねをして歌う。または、本児の歌に教師が合わせて歌う。
- ・自ら歌いだしたときには言葉と拍手で称賛する。

② の目標について

- ・まずは教師が本児の手を取り、手と手を合わせる動きを一緒に行う。できたときには言葉と拍手で称賛する。
- ・フレーズ間に間をあけるなどし、本児の動きを待つ。

③ の目標について

- ・容易な操作で音が出る打楽器を扱う。
- ・本児の演奏に教師が合わせて歌う。
- ・曲が終わったら、演奏する手を軽く止める。

【挑む】

1 授業の実際

(1) 題材名

「りずむにのってあそぼう」

(2) 本時の目標

- ① 教師の歌声を聴く、布の動きを見る、教師と一緒に身体を動かすなどし、曲調の変化に気付くことができる。
- ② 教師の援助を受けて自分で音を鳴らそうと指先を動かす、楽器に手を伸ばす、一人で楽器を鳴らすことができる。
- ③ 教師のリコーダーの演奏を聴き、楽器の音への気付きや楽器への興味関心を表情や発声、身体の動きで表現することができる。

(3) 展開

時間	学習活動	個別目標達成のための手だて及び配慮事項
10:35	1 はじめのあいさつ 「おんがくがはじまるよ」 「ハイタッチ」	<ul style="list-style-type: none"> ・手をそろえる、体幹を起こす、身体の動きを止めるなどし、注目するように促す。 ・フレーズ間に間をあけるなどし、児童が教師の手に合わせるのを待ち、合わせようとする様子が見られないときは、教師と一緒に手を合わせる。
10:40	2 「ちいさいうみ、おおきいうみ」 <ul style="list-style-type: none"> ・波に見立てた布の動きを見ながら教師の歌を聴く。 ・教師と一緒に手を動かして「小さい」「大きい」を表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手を握ることを嫌がったり、自分で手拍子をしたりしているときは、タッピングをして、強弱を感じることができるようにする。 ・少しの間でも教師と一緒に活動できたときは称賛する。 ・本児が歌ったら、教師がまねをして歌う。または、本児の歌に教師が合わせて歌う。 ・自ら歌いだしたときには言葉と拍手で称賛する。
10:50	3 「みんなおんがくか」 <ul style="list-style-type: none"> ・楽器の音を聴く。 ・教師の範唱を聴く（楽器演奏つき）。 ・教師と一緒に楽器を鳴らす。 ・一人ずつリーダーになって前で発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・曲を聴いて手拍子をしているときは無理に手を取らず、様子を見て教師と一緒に活動するようにする。 ・本児が音を出すのに合わせて歌うようにする。 ・教師の歌を聴くなどして動きが止まった場合には、手を取りたくように促す。 ・曲が終わったら、本児の手を軽く止め終わりを伝えるようにする。
11:15	4 「ゆかいなまきば」 <ul style="list-style-type: none"> ・教師によるリコーダーの演奏を聴く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏に注意が向くように、声をかけたり姿勢を整えたりする。
11:19	5 おわりのあいさつ	<ul style="list-style-type: none"> ・手をそろえる、体幹を起こす、身体の動きを止めるなどし、注目するように促す。

2 本時の学習評価

- ① 教師が歌い終わると、曲の一部を歌っていた。「びちゃん」や「ざぶん」といった擬音の部分を気に入ったようで、そこを歌っていた。
- ② 以前は、曲が始まると聴き入って、楽器は鳴らさなかったが、曲の間、自由に鳴らしていた。曲の最後の部分で、教師が手を止めると、鳴らすのを止めていた。
- ③ 曲に合わせて楽しそうに頭を振りながら最後まで教師の演奏を聴くことができた。近くでリコーダーを演奏すると、手に取り口元へ持っていつていた。

【省みる】

1 授業研究会（事例発表会）記録

- ・児童の実態をよく把握している。目標に至るまでのプロセスがきちんとできていることで授業が成功している。子どもの反応を十分に待っており、間の取り方が良かった。チェックリストで細かく実態を見たことで、手だてが適切であった。
- ・身体表現を引き出す点で工夫していることについては、「ハイタッチ」の曲を取り入れた。曲の長さ、テンポ、雰囲気を考えて選定している。
- ・楽器の提示の仕方（カーテンの奥から出てきた）については、見えないところから出して音源を探して欲しいという意図があった。見せることで早く触りたいという欲求を喚起させることもあるのではないか。
- ・楽器を鳴らす練習を一斉にすると、自分の出している音なのか、他の人の音なのか、気付きにくいのではないか。

2 1年間を振り返って

(1) 児童（生徒）の変容

<歌唱>

- ・まだ、一緒に歌うことはないが、曲の一部分であれば、教師が歌い終わると歌うことが増えてきた。音楽の授業以外の時間で口ずさんでいることも多い。

<身体表現>

- ・音楽を聴いて頭や身体を振ったり、手拍子をしたりすることができる。曲に合わせて教師にタッチをする学習では、曲を聴いて喜ぶ様子は見られるが、自分からタッチすることは、2、3回しかなく、相手を意識しながら曲を聴くことはまだ難しい。
- ・教師が手を取り曲に合わせて一緒に身体を動かす学習では、自分の好きなように動かしたくて振り払おうとすることもあったが、曲が鳴っている間は、教師と手をつないでいることが増えてきた。

<器楽>

- ・楽器には興味があり、いろいろな楽器を提示するとすぐに手を伸ばし、音を鳴らそうとする。音の鳴らし方は、マラカスなどの振る楽器でもたたくことがほとんどで、様々な鳴らし方をするのはまだ難しいが、リコーダーは口元へもっていき、鳴らし方の違いに気づいている楽器もある。終わりを意識しているような様子はまだ見られないが、曲が流れている中でも楽器を鳴らすようになってきた。曲の終わりには教師が手を止めるなどすると演奏を止めることができる。

<鑑賞>

- ・長くなると（おおよそ1分半以上）集中が途切れてしまうことが多いが、教師の演奏やCDの演奏を集中して聴くことができた。クラシック曲では、始めは頭を振るなどの身体の動きを止めじっと聴き入る様子が見られ、しばらく聴くと頭や身体を振るなどの様子が見られることがあった。

(2) 学習評価に対する教師の意識の変容

目標設定の段階で、漠然と次にできそうなことをねらっていたが、チェックリストを活用したことで、本児が今どの程度の力をもっていて、次に学ぶところはどこなのか、ということ把握することができた。目標が具体的になったことで、授業のねらいも明確になった。また、チェックリストの発達の段階・意義を意識して手だてを考えたことで、手だてがより具体的になったと感じた。今どのような関わりが必要なのか、それを音楽の授業全体や、一つの曲を通して考えることで、手だてが具体的になったと感じた。また、TTの場面でもチェックリストがあることで、手だて（関わり方）を共有し、児童への一貫した関わり方へつなげることができた。

3 グループのまとめと今後の課題

・本グループは、運動・動作面の実態は様々であるが、スコア4～8程度の実態の児童生徒のグループである。それぞれの児童生徒の具体的な様子や指導の工夫などを出し合い、段階・意義に照らし合わせていくことで、適切な目標設定ができ、具体的な姿を思い描きながら授業に臨むことができるようになり、日々の授業に手応えを感じるようになった。

本グループでは、以下の点について意見を出し合い協議を深めた。

○音楽の段階・意義の理解について

- ・チェックリストをつけていく際に、国・算のチェックリストより高めのスコアに○がついたり、虫食的に○がついたり、限りなく○に近い△が多くある児童生徒が多く、実態よりも上の段階をねらってしまったことがあったが、日頃の学習の様子を段階・意義に照らし合わせ、協議することで今ねらうべきところを絞り込むことができた。
- ・過去に目標がなかなか達成できなかった理由が分かり、漠然と次にできそうなことをねらうのではなく、少し上を丁寧にねらっていかなければならないと感じた。よって指導する際、スコアや段階・意義を意識して声かけや支援をしていかなければならないと感じた。

○手だてについて

- ・チェックリストという共通のツールをもとに話しあい、個々の目標や手だてを事前に確認して授業に臨み、共通した援助の方法で指導することができた。同じ曲でもクラスの中で一人一人についてねらうべきところがはっきりしてきたので、必要な教具の準備もスムーズにできるようになった。

○評価について

- ・目標を細かく立てられるようになったので、ピンポイントでの評価ができるようになった。
- ・クラスによっては事前に評価シートを作成し、事前に評価を考えることで授業への心構えが十分にできるようになった。
- ・授業をしながら次の時間は「○○な姿」を引き出したいと次の目標をイメージできるようになった。

○教科と自立活動について

- ・姿勢の保持や上肢の動きに課題のある児童が多いため、自立活動と関連させて意識的に取り組んでいく必要がある。

○音楽と「身につけてほしい力」との関連

- ・「声を出す」、「歌らしきものを歌う」、「手をたたく」、「曲が流れると身体を動かす」、「楽器に手を伸ばす」、「ばちを持ってたいこを数回たたく」、「音に気付いて音源を探す」など、それぞれの児童生徒によって、できることや得意なことがある。なかには、一人で聴いたり歌ったりして楽しむことが多い児童生徒もいるため、周りの人と一緒に歌ったり（楽器を鳴らしたり、身体を動かしたり）、楽しさを共有したりするために、身近な大人や友達との関わりを促すような活動を継続的に授業の中に取り入れていく必要があると考える。

《Dグループ実践事例》

事例対象生徒 中3年 男子

【知る】

1 学びの履歴（中学部1年）

歌唱	身体表現	器楽	鑑賞
<p>・「ラバンバ」では、最後のかけ声に片手を挙げて「ヘイ！」とすることができた。</p> <p>・「テキーラ」では、教師の声かけがあると、合奏の合間のかけ声で、「テキーラ」と間を開けて自分から言うことがあった。</p>	<p>・「Head Shoulders Knees and Toes」の歌に合わせて、一人で頭・肩・目・耳・鼻・口を触ることができた。</p>	<p>・教師の声かけがあればはじめの1拍を待ってリズム打ちをすることができた。</p> <p>・「ドミソ」の和音が鳴る補助具を付けたキーボードの演奏は、教師が手を誘導するとボタンを押して鳴らすことができた。</p>	<p>・「四季より春」の鑑賞では、曲のテンポに合わせて首を振りながらじっくり聴くことができた。</p>

（中学部2年）

歌唱	身体表現	器楽	鑑賞
<p>・「明日という大空」を好み、曲の1節である「はるばると」のフレーズを声に出して、「はるばると、お願い」と歌を催促することがあった。</p>	<p>・「のんのこ節」では、友達の演奏や「こりゃさあさあ」のかけ声を聞いて、次第に気持ち盛り上がり、頭をグルグル回して喜びを身体で表現することができた。</p>	<p>・タンバリンを差し出すと、自分から手を伸ばして、指先や手のひらでリズムや音の強弱をつけてタンバリンをたたくことができた。</p> <p>・「星の世界」では、ベルハーモニーを机の上に置くと、手探りで探し、手を開いて自分なりのリズムで鳴らすことができた。</p>	<p>・トーンチャイムとベルハーモニーの合奏に聴き入り、曲が終わると自分から拍手をすることができた。</p> <p>・「HEY JUDE」の生演奏の鑑賞では、身体を動かさずにじっと聴き入り、曲が終わると笑顔になった。</p>

2 実態把握

（1）学習指導要領知的障害の教科の内容の選択

段階	内容
小学部2段階	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽に合わせて、簡単な身体表現をする。（身体表現） ・打楽器などを使ってリズム遊びや簡単な合奏をする。（器楽） ・好きな歌ややさしい旋律の一部分を楽しく歌う。（歌唱）
小学部3段階	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な人の歌や演奏などを聴き、いろいろな音楽に関心をもつ。（鑑賞）

(2) 学習到達度チェックリストに照らした実態把握

観点	うたう	音に合わせて動く	かなでる	聴く・聞く
スコア	1 2	1 2	1 2	1 8

スコア上ではおおむね1 2～1 8であるが、段階・意義を踏まえながらチェックをしていくと、それ以上のスコアにもいくつかの○や△がつく項目があった。

観点	スコア	項目	評価
うたう	1 8	歌詞を一部覚えて、一緒に歌おうとする。	△
		リズムに合わせて声を出すことができる。	△
	2 4	発音は不明瞭であるが、フレーズを口ずさむ	○
音に合わせてうごく	1 8	曲の一部に合わせて自分なりのリズムで手をたたく	○
	2 4	身体の中での鼻や口、肩といった細かな部位を示すことができる。	○
	3 6	手遊び歌に合わせた、動きをする	△
かなでる	1 8	様々な楽器に応じた鳴らし方が分かる。	△
	2 4	簡単なリズムをたたくことができる	△
		旋律楽器において、目印をたよりに指一本で押して鳴らすことができる。	
		楽器を持つ、演奏を始めるなど簡単な指示を理解する。	
4 8	教師や友達と交互に演奏する (中3 2学期)		
聞く・聴く	2 4	特定の楽器の音を聞き分ける。	△

(3) 実態についての考察

本児は様々なリズムで楽器を鳴らすことを楽しんだり、曲のテンポや曲調を感じ取ったりする力がある。

演奏をするときは、自分なりのリズムで楽器を繰り返し鳴らしたり、手のひらや指先を使って演奏したりすることができる。

曲を聴くときは、様々なジャンルの曲にじっと耳を傾けて聴き入り、繰り返し聴くと曲調の違いを感じて体を揺らしたり、自分なりのリズムで指先を使って机をたたいたりすることができる。気に入った歌詞の一部やフレーズを覚え、自分から「○○お願いします」と言って同じ曲をもう一度聴いたりすることもできている。

また、曲の始めと終わりを分かって音を鳴らしたり、教師の声かけに応じて楽器を鳴らしたりすることができ始めている。友達の演奏を聴くときには、手を止めて友達の演奏をじっと聴く様子も見られ、友達や教師の奏でる音を聞き、自らも音を出して演奏に参加する力が育ってきている生徒であると捉えた。

【描く】

1 音楽の年間目標

○歌詞の一部を覚えて口ずさんだり、曲調に合わせてリズムを取ったり身体を揺らしたりすることができる。

○曲の特徴やリズムを感じ取り、手や打楽器などでリズム打ちができる。

2 手だて

・教師と交互に歌ったり、時に教師が歌を止めることで、次のフレーズを歌いたくなる場面を作る。

・指先でテーブルをたたいて自由にリズムを取ることや身体を揺らしながら聴いたりする様子进行评估

して称賛する。

- ・タンバリンなど楽器に応じた手の使い方を、教師が手をとって教える。
- ・楽器に手を伸ばしやすいように、楽器の設置場所や角度などを工夫する。
- ・楽器演奏は援助を徐々に減らして、最小限の支援で動きを引き出す。
- ・関わりすぎると近くの教師に気が向き、授業に集中できなくなるため最小限の支援に留める。

【挑む】

1 授業の実際

(1) 題材名 曲の響きを感じて (トランペット協奏曲・主は冷たい土の中に・エーデルワイス)

(2) 本時の目標

- ・シロフォンで曲のメロディーを聴き、響きの美しさを感じ取る。
- ・曲のリズムに合わせて、トーンチャイムやベルハーモニーなどの音を鳴らす。
- ・いろいろな楽器の音の重なりに気づき、演奏に取り組む。

(3) 展開

学習活動	手立て及び配慮事項
<p>○「♪トランペット協奏曲」 (鑑賞)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特徴的な楽器の音色について注目して聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の最初に聴き、音楽への関心や意欲を高める。 ・周りを暗くして音に集中しやすくする。
<p>○「♪主は冷たい土の中に」 (器楽)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ベルハーモニーを鳴らす。 ・個人で練習した後、全体で合奏をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が対象生徒 0.H の手を添えて、机上にある楽器に触れることで、位置が分かるように伝える。 ・一人で鳴らすことが難しい場合は、必要最低限の援助をする。 ・T1 が、メロディーを演奏する。 ・演奏するグループ・聴くグループに分かれ、順番に発表する。 ・聴くグループに対しては、姿勢を整え、聴きやすいようにして声かけは最小限にする。
<p>○「♪エーデルワイス」 (身体表現)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・合唱を聴いたり、教師が目の前で歌うのを聴いたりする。 ・声が出せるところでは、自分なりに声を出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が横で歌いながらメロディーに合わせて左右に揺れたり、車いすを押したり引いたりする。

2 本時の学習評価

「主は冷たい土の中に」の演奏では、2つのベルハーモニーを使い、対象生徒 0.H が曲に合わせて鳴らすよう取り組んだ。練習を始めた頃は、教師が歌うメロディーに合わせて自分なりにリズムを取り、片手でベルハーモニーの音を鳴らすことができた。そこで、曲に合ったタイミングで両手でたたきこを教師がねらったところ、設定した課題が高すぎたため、生徒が演奏する意欲をなくしてしまった。

【省みる】

1 授業研究会（事例発表会）記録

- ・学習到達度チェックリストを参考に対象生徒 O・H さんの目標を立てた。現在のスコア以上のところに○や△などの芽生え行動が見られた。横への学びの充実とともに縦の成長をねらうことが可能な生徒であり、芽生え行動のどこをねらっていくか考える機会となった。また、段階・意義を踏まえて、チームティーチングや手だてを工夫していくことの必要性を感じた。
- ・O・H さんはおおむねスコア 12 の発達段階。スコア 18 の「他者意図の理解」の段階・意義を踏まえるのではなく、今いるスコア 12 の「相互的なやりとりの拡大」を踏まえるべき。実際、対象生徒 O・H さんの変容から、身近な大人とのやりとりの中で音楽の学びの充実が図られていると考えられる。縦への伸びももちろんねらっていく必要があるが、O・H さんに「身に付けてほしい力」を考えたとき、今持っている力を使って存分に横への学びの充実を図っても良いと考える。

2 1年間を振り返って

(1) 児童（生徒）の変容

<歌唱>

- ・教師が歌いかけると、歌詞の一節や短いフレーズを覚え、曲のリズムに合わせて歌うことが増えてきた。

<身体表現>

- ・「エーデルワイス」では、教師と一緒に手を取り合い、曲のテンポやメロディーに合わせてゆっくりと左右に揺れることができた。

<器楽>

- ・友達や教師が鳴らす音を意識して演奏する様子が多く見られるようになってきた。『日本の音楽に親しもう』の単元では、教師が締め太鼓で「トントトントン」とリズム打ちをすると、ボンゴで「トントトントン」と、決まったリズムをたたいて応えたり、同じリズムで「ヨッシリヨイサ」と口ずさみながら演奏したりすることができた。
- ・教師と交互にボンゴやタンバリンを鳴らして、楽しみながら演奏することができるようになってきた。終わる合図を理解し、合図を聴いて演奏を終えることもできた。
- ・友達の鳴らす楽器の音が聞こえてきたときに、手を止めてじっと聴き、演奏が終わるとまた弾き始める様子が見られるようになってきた。
- ・これまでは合奏のときに聴き入ることが多かったが、教師の声かけや援助があれば、自分なりにリズムを取ってその曲が流れている間に演奏することも見られるようになってきた。

<鑑賞>

- ・5分間程度のクラシック曲の始まりから終わりまで、体の動きを止め、集中してじっと聴くことができた。

(2) 学習評価における教師の意識の変容

学習到達度チェックリストは、指導をする上では、実態把握や目標設定を行う際の根拠の一つとなるものであるが、項目がそのまま指導内容になるわけではないということを認識し、発達の段階・意義を踏まえつつ、音楽の授業で身につけさせたいことを含めた児童生徒の全体像を見ることの大切さに気付くことができた。

児童生徒が今どの段階・意義にあるのかをきちんと押さえ、次の段階はどこか、次の段階に進むにはどんな力を身につけることが必要なのか、といった見通しを教師が持って指導することを意識するようになった。

3 グループのまとめと今後の課題

本グループは、スコア12～36の実態の児童生徒のグループである。スコアからもわかるようにグループ内の児童生徒のスコアに幅は見られるものの、音楽の授業においては、自分に合った方法で歌ったり、楽器を鳴らしたり、曲のリズムを捉えたりすることができるようになってきている。また、音楽を通して教師や友達とのリズム遊びや、やりとりなどへの興味が芽生えてきており、現在持っている力や芽生えてきている力をどう授業に生かし、関連させながら伸ばしていくかが焦点となった。

○段階・意義の理解について

- ・スコア12「相互的なやりとりの拡大」では、自由に曲を聴いたり、楽器を鳴らしたりする学習活動から、次第に音楽を通しての模倣やリズム遊びなど特定の教師をはじめとした相手とのやりとりが中心となってくることを確認した。
- ・スコア18「意図の理解と共有」では、特定の教師とのやりとりには、相手が意図するリズムや鳴らすタイミングなどを理解し、共有する必要があることを確認した。これらの学習活動を通して、音楽が本来持っている楽しさや美しさに加えて、教師や友達と一緒に共有することの楽しさや喜びを感じ取ることができるのではないかと考えた。
- ・スコア24～36の児童についても、これまでの授業では楽しむことが優先されていた従来の授業から、研究を進めていくことで段階・意義を踏まえた目標や指導内容の設定、評価に着目し、発声の仕方や楽器の鳴らし方などの技能面も高めていくようにすることで、さらに音楽を楽しめるようにした。

○手だてについて

- ・教師と一緒に交互に歌ったり、途中で教師が歌を止めたりすることで次のフレーズを歌いたくなるようにした。また楽器に手を伸ばしやすいうように置く位置や角度を調節した。教師の合図を見たり、楽器を鳴らすタイミングをよく聴いて鳴らしたりするなど、児童生徒が相手に注目することの重要性についても確認をした。さらに、自分で歌ったり楽器を鳴らしたりする際、楽器の持ち方や鳴らし方などの技能面も高めていくことが、一層、音楽に対する興味を広げていくのではないかと考えた。

○評価について

- ・従来の評価は、「楽器を鳴らすことを楽しむことができた。」などの表記が多かったが、段階・意義に基づくことで、教師や友達とのやりとり、歌ったり楽器を鳴らしたりする際のタイミング、演奏における技能面などについて細かく評価ができるようになった。

○教科と自立活動について

- ・楽器を持ったり鳴らしたりする際に必要な上肢の動き、音源や教師に注意を向けたり聞いたりする力など、自立活動においてその基礎的な力を培っていくことで、音楽の授業ではさらに充実した取組が期待できると考えた。

○音楽と身につけてほしい力との関連

- ・将来的には音楽を余暇活動の一つとして捉えながら、充実した生活を送るには「興味関心を広げる力」を高めていくことが必要である。そのためには、前述した音楽を通じた相手とのやりとりや技能面の向上は欠かせないものであり、これらの力を高めていくことで、さらに音楽の楽しさや美しさを感じることができるようになると考えた。

《Eグループ実践事例》

○事例1

事例対象児童 小2年 女子（訪問教育）

【知る】

1 実態把握

(1) 学習指導要領知的教科の内容の段階に照らした実態把握

1段階

- (1) 音楽が流れている中で体を動かして楽しむ。
- (2) 音の出るおもちゃで遊んだり、扱いやすい打楽器などでいろいろな音を鳴らしたりして楽しむ。

2段階

- (1) 好きな音や音楽を聴いて楽しむ。

(2) 学習到達度チェックリストに照らした実態把握

①うたう（スコア1）

気管切開をしているため声は出せないが、歌や音楽が聴こえると目をきょろきょろさせ、何の音かを感じるような表情を見せたり、聴き慣れてくると笑顔を見せたりすることがある。

（★声が出せないためにスコア2以上のチェックはつけることができない。）

②音にあわせてうごく（スコア2）

音楽に合わせて教師が手を出すと、手を挙げて応えることができる。

③かなでる（スコア2 5月）→（スコア4 10月）

自分の手で楽器を握って鳴らすことはできないが、補助具を利用して太鼓をたたいたり、鈴を鳴らしたりすることができる。

持ちやすい楽器(鈴)を手に持ち、振って鳴らすことができる。ボンゴやタンバリンを近づけると手を伸ばして触れることがある。(10月)

④聞く・聴く（スコア2）

歌や音楽が聴こえると、音源を探して視線を動かす。

<実態についての考察>

全体的には外界への注意の焦点化と探索、自発運動という段階・意義（スコア2）であるが、家族の声を聴き分けたり、問いかけに対して手を挙げて応えたり、補助具を使うと簡単な物の操作ができることから、他者への注意と反応、発声、注意の持続、物の単純な操作、自体の操作ができる段階（スコア4）にあると思われる。5月の段階では、身体機能面から手に補助具をつけての楽器の操作しか実施していなかったが、2学期に本児が持ちやすい楽器（鈴）を作って、手に持たせると、自分で振って音を出して楽しむことができた。身体機能面や環境面の影響で、取り組める活動の幅がかなり制限されるが、やりとりの予測、パターン化、学習による行動変化、音声や表情の模倣、注意の追従、物のやや複雑な操作、状況に合わせた自体の操作という段階意義（スコア6）に達していると思われる場面も見られる。

【描く】

1 音楽の年間目標

- ・ 曲や楽器の音に関心を持ち、音源の方を見たり、表情を変えたりする。
- ・ 楽器を持ったり触ったりして、音を鳴らすことができる。
- ・ 好きな活動や曲に対して、表情や動作で気持ちを表すことができる。

2 手だて

- ・ いろいろな曲調の曲や楽器の音を聞くことで、好きな曲や楽器の音を見つける。
- ・ 自分の身体の動きで簡単に音を出せるような楽器を使用する。
- ・ バルーンや抱っこ揺れで、いろいろな曲調を感じさせる。

【挑む】

1 授業の実際

(1) 題材名

リズムにのってあそぼう (虫の声、いるかはざんぶらこ、この空とぼう)

(2) 題材の目標

- ① 歌や虫の鳴き声等に関心をもって聞くことができる。
- ② 鈴の音を鳴らすことができる。
打楽器などに触ろうと手を伸ばすことができる。
- ③ バルーンの揺れを楽しみ、表情や動作で気持ちを表すことができる。

(3) 展開

- ① ペープサートや虫の画像を見せたり虫の鳴き声などを聴かせたりして、歌や音への興味を引き出す。
- ② 持ちやすい形状の手作り楽器を使用する。
楽器の音を十分に聞かせ、楽器に関心をもたせる。
- ③ 安定した姿勢をとらせ、バルーンや抱っこで揺れを感じさせる。
表情の変化や動作の表出を待つ、バルーンを揺らしたり活動を終わったりする。

2 本時の学習評価

目標① (歌や音声 への関心)	使用曲「虫のこえ」 <ul style="list-style-type: none">・ 歌が流れると音源に注目し、時々右手を動かしていた。虫の画像やペープサートに注目しながら聴いている様子が見られた。・ 虫の鳴き声では、くつわむしの鳴き声に対して舌を出した。鳴き声を区別していたようだ。・ 虫の擬音では、どの音にも関心をもって聴くことができた。感情の表出なのか右手の動きに違いが見られた。
-----------------------	--

目標② (楽器への 関心)	使用曲「いるかはざんぶらこ」「この空とぼう」 <ul style="list-style-type: none"> 音の出る物には興味をもち、注目し続けることができ、自分から手を動かして触る動きが見られた。(タンバリン、ボンゴ) 鈴は、音の鳴り始めと終わりに気付きながら、自分で鳴らすことができた。
目標③ (揺れへの 関心)	使用曲「この空とぼう」 <ul style="list-style-type: none"> 揺れが止まると、催促するように頭を動かした。揺れに満足すると頭は動かさなくなった。 曲が終わる前に、左手を挙げて催促する様子が見られることもあった。 揺れているとき、鼻の下を長く伸ばしていることが多かった。(快表情)

【省みる】

1 授業研究会（事例発表会）記録（*後述）

2 1年間を振り返って

(1) 児童の変容

音楽に関わる様々な活動を通して、本児の持っている力を引き出すことができた。本児は、肢体不自由による動きの制限はあるが、外界の刺激に関心を示し、見たり聞いたりする活動に取り組める児童である。歌や楽器、身体の動きを使って音楽に親しみ、以下のような様子が見られた。

タブレットを使い、画像を見せながら歌を聴かせた。歌が流れると音源に注目し、時々右手を動かしていた。画像やペープサートに注目しながら聴いている様子が見られた。虫の鳴き声や擬音に関心をもち、注意して聴くことができた。

楽器の演奏では手に補助具をつけて太鼓をたたいたり、補助具に直接つけた鈴やでんでん太鼓を一人で振って鳴らしたりすることができた。補助具をつけると手を動かすという動作を意識しているようで、すぐに手を動かし、手元を見て楽しんでいる様子が見られた。手作りの鈴は、親指と人さし指の間にはさんで持ち、音の鳴り始めと終わりに気付きながら、自分で鳴らすことができた。また、楽器の音をよく聴くことができ、自分から手を動かして触る動きが見られた。

バルーンでの揺れでは、前奏が鳴り始めたときに期待した表情が見られたり、揺れているときに笑顔が見られたりした。曲が終わると左手を挙げて「もう1回」を要求することがあった。揺れが止まると、催促するように頭を動かし、揺れに満足すると頭は動かさなくなった。

(2) 学習評価に対する教師の意識の変容

本題材の目標を設定する際、本児の実態から歌や音声・楽器・揺れに対する関心という3つの観点で考えた。この観点は、学習到達度チェックリストの4つの項目と対応する部分があり、どの程度の発達段階にあるのかを客観的に捉えることができ、具体的な目標を考える際の参考になった。また、各スコアの段階・意義を理解することで、チェック項目にはない本児の様子から現在もっている力を知り、次の目標設定の視点などを考えることができ、それを受けて学習内容を検討し実践に活かすことができた。音楽科の指導の観点だけでなく認知発達の側面からも評価することで、本児の発達を総合的に捉えることができた。

○事例2

事例対象児童（生徒） 中2年 女子（訪問教育）

【知る】

1 実態把握

（1）学習指導要領知的教科の内容の段階に照らした実態把握

小学部1段階

- （1）音楽が流れている中で身体を動かして楽しむ。
- （2）音の出るおもちゃで遊んだり、扱いやすい打楽器などでいろいろな音を鳴らしたりして楽しむ。

（2）学習到達度チェックリストに照らした実態把握

①歌唱（スコア 2）

- ・「ア～」 「ナ～」などの声を出す。声を出し笑う、泣く。
- ・機嫌の良いとき、好きな歌が聞こえると声を出すこともある。
- ・姉の気配を感じると呼ぶように声を出す。

②身体表現（スコア 2）

- ・手足の曲げ伸ばしや物を握ることができる。頭・腰を動かすことができる。

③器楽（スコア 2）

- ・目の前に差し出された楽器や音源に視線を向けることができる。
- ・楽器を持たせるとしばらく持つことができ、教師と一緒に演奏することができる。

④鑑賞（スコア 2）

- ・聞こえてくる音や曲に気づき、表情を変える。

【描く】

1 音楽の年間目標

- ・いろいろな音楽に関心を示したり、楽器を鳴らしたりすることができる。

2 手だて

- ・いろいろな曲調の音楽を繰り返し聴かせたり、音楽に合わせて身体を動かしたりする。
- ・左右いろいろな方向に音源を置き、音への反応を引き出す。
- ・楽器のいろいろな感触に慣れるよう様々な教材で取り組む。
- ・いろいろな楽器を使い、音に対する興味の幅を広げる。

【挑む】

1 授業の実際

（1）題材名 ○曲調を感じとろう「夏の日のおくりもの」「長崎くんち」

（2）本時の目標

- ①音への反応を引き出す。
- ②音の違いの曲を聴き、視線や表情で表わすことができる。

（3）展開

- ・「夏のおくりもの」は、音調の違いがわかりやすいようにパートごとに聞かせる。
- ・落ち着いた曲「夏の日の贈りもの（混声）」とにぎやかな曲「長崎くんち」という曲調の違う曲を使う。
- ・音源の場所を変え音への反応を引き出す。

2 本時の学習評価

目標①について

- ・音が聞こえてくると、音を探るように音源に顔や視線を向けることができた。

目標②について

- ・「夏のおくりもの」では、混声・女声・男声パートそれぞれの曲を聞いたが、苦手な男声も抵抗なく聴くことができた。
- ・「長崎くんち」のにぎやかな音でも不快の表情は見せずに聴くことができた。

【省みる】

1 授業研究会（事例発表会）記録

- 教科を設定して年齢相応の曲を選んで授業をすることができたという成果や、目標や評価をきちんと次のステップにつなげていくことができたという成果があった。昨年の教育課程での音楽の取り扱いとどのように変わったかについては、基本的に指導内容は変わっていないが、題材の意味をしっかりと理解したうえで授業ができたという成果はある。しかし、訪問教育という指導時間が短い状況の中では授業時間を確保し、継続的に取り組むにはなかなか難しい面も多かった。
- 今年度教科別の指導として音楽の授業をしてきたが、昨年度も音楽の題材として扱うときは、共通教材から精選して取り組んでいたおり、学年相応の曲を選定していた点では、今年度も同じである。何の題材を選ぶかよりどう提示するか、という点も大切である。短い指導時間で効果的に力をつけるために教師の技量を高めることや授業の構成力を入れたいと思う。

2 1年間を振り返って

(1) 児童（生徒）の変容

- ・中学1年時は、男性の声が苦手聞こえてくると不快の表情を示すことが多く見られた。また、にぎやかな場所が苦手、大勢の人の声やざわめきを感じると不快の表情を見せたり、泣いたりすることがあった。ところが、2年生になると、機材を通して聞こえてくるにぎやかな音や男性の声に対して不快の表情を見せることは少なくなった。
- ・音楽は以前から好きな活動の一つではあったが、鑑賞時に見られる様子が「穏やかな表情で聴く」から「音源の方に視線を向ける」に変わってきた。音が聞こえてくると視線を左右に動かし音源を探している様子も見られた。

(2) 学習評価に対する教師の意識の変容

- ・限られた時間、環境で授業を行う訪問教育の教科としての音楽の在り方や効果的な授業の進め方等について訪問担当の教師全員で考え、取り組む機会ができた。
- ・音楽の教材を検定教科書や、著作本の中から選択したことで、該当年齢相応の曲や聞き覚えのある曲など幅広いジャンルの音楽を扱うことができた。また、その指導方法等についても同学年担当の教師と情報交換や教材研究をする機会が増えた。

3 グループのまとめと今後の課題

訪問教育部では、教師は基本的に児童生徒と一対一で授業に臨んでおり、授業時間もまちまちであることから担当者がそろって話し合うことが難しく、担当している児童生徒に対してお互いに情報の共有を行うことが少なかった。しかし、共通の研究テーマと課題に向き合うことで、それぞれの課題や教材教具の工夫について話し合い、情報交換するようになった。また児童生徒の目標や課題、評価についても、訪問教育の特性上、主観的になりがちだった部分を教師間の話し合いによって客観性をもたせることができたことは、成果としてあげられるだろう。また学習到達度チェックリストを活用することで、児童生徒の反応や行動の解釈について多方向からの視点で見ることができ、教材や題材の提示の仕方、授業の構成など授業の改善へとつながってきたと感じている。「音楽」の授業を計画するにあたり、学齢相当の検定教科書から題材を選んだことで、季節の歌に偏りがちだったのが、広いジャンルの楽曲を用いるようになり、児童生徒に新しい経験をさせることができた。また学年による系統性を持たせ、題材の偏りや履修の重複を防ぐことにもつながった。また、タブレット端末などの教具を多用することにより、音楽と映像、画像など複数の教材を組み合わせた提示や、手立ての工夫ができ、授業の精度が上がってきたと感じている。

しかし、訪問教育での時間数の制限（週6時間）や、家庭や病院のベッドサイドで授業を行うという学習環境の制限を考えると、「音楽」「美術」を独立した教科として時間を区切って学習を進めていくことに困難さを感じている。児童生徒の生活の流れや季節の伝統行事、一人ひとりの実態に即して、教科等を合わせた指導の中で教科の視点を持ちながら総合的に学習を仕組んでいく必要性を感じている。したがって、教科の内容・題材の精選、教材や教具の工夫や提示の工夫など授業改善につながる研究をさらに重ね、教師主導ではなく児童生徒の立場のたった達成感のある教育課程や授業づくりを目指していきたいと考える。

(2) <全> : 教育課程編成について

【知る】

①前年度までの教科の目標設定と評価の課題

- ・教科を設定して指導をしてきたが、個別の指導計画の目標や手だてが毎年変わらない。
- ・目標があいまいなため、評価の観点があいまいで様子記述のみになる。
- ・教師の主観的な学習評価になりがちで、児童生徒が実際に学んだ履歴がわかりにくい。

②学習到達度チェックリスト（音楽版）を活用した目標及び手だての設定

各スコアの「段階・意義」を踏まえて、以下のような目標や手だてを導き出すことができる教師が増えた。

音楽の年間目標及び手だて（事例対象児童生徒以外を抜粋して記載）

目標	手だて ※「段階・意義」のことば（スコア数値）
歌唱：1 身体表現：2 器楽：1 鑑賞：1 ○音楽遊びをする中で、教師と一緒に動くことや提示された教材の動きに気づき表情や発声で伝える。 ○音や曲、歌声を聴いて、音源に注意を向け、表情や発声で伝える。 外界への注意の焦点化と探索（2）	・聴く活動では、曲が終わったらしばらく待ち、本人の表出を待つ。 ・大きな音の出る楽器だけでなく、ほどよい音量の楽器を静かに聴かせる時間を設ける。 ・静かな中で歌や楽器を聴かせ、音に気づきやすくする。 ・音や動きの変化ではON OFFを明確にする。 外界への注意の焦点化と探索（2） ・曲のリズムやテンポを感じられるように、動く速さやタッピングで伝える。 ・自分の体を動かすだけで音が出る楽器（教材）ツリーチャイムなどを使い、音に気づかせるようにする。 自発運動（2）
歌唱：2 身体表現：2 器楽：1 鑑賞：2 ○教師の援助を受け入れ、身体の力を抜いて、一緒に身体を動かすことができる。 ○楽器の音や教師の歌声に気づき、表情や発声、身体の動きで表現することができる。 外界への注意の焦点化と探索（2）	・力を抜くなど一緒に活動できたときは称賛する。 ・本児の表情や発声、緊張の状態等観察し、変化があったときには、言語化して本児に伝えるようにする。 ・本児が握りやすいように工夫をしたり、本児の動きでなるような楽器を多く体験したりすることで、称賛される機会を多くもつことができるようにする。 自発運動（2） ・聴覚だけではなく振動など触覚からも音を感じるができるようにする。 ・表出するまで時間がかかるので、曲が終わったあと、楽器を鳴らしたあとなどは間をあげじっくり表出を待つようにする。 外界への注意の焦点化と探索（2）
歌唱：2 身体表現：4 器楽：6 鑑賞：2 ○歌に合わせて、教師と一緒に身体に手を触れたり、手を合わせたりすることができる。 ○関心がある楽器に自ら手を伸ばし、触って鳴らすことができる。 物のやや複雑	・できる限り児童の表情や身体の動きに合わせて歌ったり、反応を待つために間を置いたりする。 ・楽器を演奏させる場合は、容易な操作で音が出る楽器を用い、自ら手を伸ばしやすい位置に置くなど、提示方法を工夫する。 物のやや複雑な動作（6） ・音を鳴らしたり、自ら声を出したりしたときは、目を合わせて称賛する。 他者への注意と反応（4） ・教師と一緒に楽器を鳴らすときは、肘や手首に手を添えるなどして本児の動きに合わせるような支援をする。

<p>ひ動作 (6) ○教師の歌や楽器の演奏に注意を向け、表情や発声で気持ちを表現することができる。注意の持続 (4)</p>	<p>・鑑賞では、教師が視線を合わせながら目の前で楽器を演奏し、興味関心をより引き出すようにする。注意の持続 (4)</p>
<p>歌唱：12 身体表現：12 器楽：12 鑑賞：18 ○教師の声に合わせて、自ら身体を動かしたり簡単なフレーズを歌ったりすることができる。 ○音楽の始めと終わりを意識して、打楽器を演奏することができる。 相互的なやりとりの拡大 (12)</p>	<p>・曲を覚える際の学習活動では、CD や伴奏に合わせた教師の歌声を聴かせるようにする。 ・歌唱を促す場面では、CD等は使わず教師の歌声のみで行う。まず教師が歌い出し、歌に気づかせる。歌い出したら、教師が対象児の声に合わせるようにする。 ・全部一緒に歌うことができたなら、対象児と視線を合わせ、言葉と拍手で称賛する。 ・容易な操作で音が出る打楽器を扱う ・教師の歌声に合わせて楽器を演奏する。 ・曲が終わったら、演奏する手を軽く止める。 ・対象児が楽器を演奏する前に声かけとジェスチャーで教師に注目させてから始める。 ・教師の合図や歌声を見たり聴いたりして打楽器を演奏できたなら、対象児と視線を合わせ、言葉と拍手で称賛をする。 相互的なやりとりの拡大 (12)</p>

③児童生徒の変容

2学期末の個別の指導計画の評価時期に合わせて全教師にアンケートを実施した。

○「児童生徒の変容」と「なぜその変容が見られたと思うか」の2点について尋ねた結果を以下に記載する。

音楽の授業作りに関するアンケート（平成25年12月実施）

《変容が見られた》

○昨年度の様子が変わらないので（記録以外に）わずかな変容が明らかに今年の変容であると断定できないが、歌唱のとき教師をまねるように声を出すようになった。

→明確にわからないが、子どもの見える範囲や注意が届く範囲を考え、そばで歌う、歌った後少し間をおいて音がない部分に気づかせるなどの手だてを講じたことが理由の1つと考えられる。

○好みの音楽が流れているときに、時々声を出すようになった（1学期は見られなかった）。また、子どもが一人で音遊びをしているときにそれをまねして担任も声を出していたら、声でのやりとりに発展した。（音楽の時間ではないが）

→目標となる行動「好きな音を聴くと声を出す」や「機嫌よく声を出しているときにまねてやるとそれをまねて声を出す」を念頭に置いて関わるようにした。

○器楽においては、自分流に自分が好きなリズムとテンポで音を出すことはできていたが、短い曲や繰り返しのある曲でも一定のリズムやテンポで音を出すことができるように

なった。鑑賞においては表情の表出が多く見られるようになった。
→これまでの学習の成果を踏まえながら、スモールステップで目標を設定できたから。

○授業の中で歌うことが増えた。教師が歌う姿をよく見るようになった。
→教師がこの授業では子どものこういう姿を引き出したいというようにねらいたい姿が明確になったことで手だてが具体的になったから。

○歌唱において、途中途切れはするものの始めから終わりまで声を出して歌うことができる姿が見られた。器楽で曲の終わりに気づいて手を止めることができた。
→実態に合わせ、歌唱ではゆっくりな伴奏にしたり伴奏なしにしたりするなど、手だてを変えて指導したため。ねらう姿を教師間で共有できたため。

○楽器に合った鳴らし方ができるようになった。(カスタネット：手で打つ、太鼓：ばちで打つ、木琴：ばちを横に動かす、マラカス：振る など)「タン、タン、タン」程度のリズム打ちができるようになった。曲に合わせた手遊びや身体表現ができるようになった。
→適切な実態把握に基づいて、教材の提示の仕方や手だての工夫をしたこと。教育課程の単元や題材の配列が良いこと。学習到達度チェックリスト(音楽版)を活用するとどこが伸びたかよくわかる。

○同じ曲を繰り返し学ぶことによってリズム打ちがうまくなったり、模倣ができたりするようになった。
→継続した学習と児童生徒のペースに合わせてじっくり学ぶ時間をとったこと。

○楽器を鳴らす場面で、比較的タイミングよく鳴らし始めることが増えてきたように思う。
→教師が求めていることの理解が進んだ。また、集中して教師に向かえるようになった。

○楽器の音や教師の働きかけの後に、呼応するように発声をする場面が見られるようになってきた。また、特定の音や気に入った音に対して笑顔を見せるなど、表情で呼応するような場面が見られるようになっている。
→段階・意義に沿って目標や手だてを設定してきた点にあると思う。特に手だてについては、外界への気づきを特定の教師や働きかけと捉えて、繰り返し関わってきたことで生徒の中に呼応しようとする気持ちの芽生えを育んできたことが成果につながったと考える。

《変容が見られなかった》

- ・変容がなかったというわけではないが、児童生徒をよく見るができなかったし、音楽の授業での変容なのかわからなかったため。
- ・覚醒状態が悪く、授業参加が難しかった。
- ・元々持っている力の表出や持続ととらえた。変容とまでは言えない。

【描く】

○教育課程の編成で考慮すべきこと

各教師が学習到達度チェックリスト（音楽版）を用いて実態把握を行い、授業実践に取り組んだことで、「縦への伸び」は意識しつつも、児童生徒の実態によっては「横への広がり」を重視した上で教育課程を編成することの重要性を確認した。音楽の指導で特に「身につけてほしい力」として「見たり聴いたりする力」「興味関心を広げる力」「余暇を楽しむ力」も念頭において、題材名や単元期間などを検討する必要がある。

→該当学年の検定本から題材を選ぶ。

→単元は、2か月に1つの設定にする。

○教科と自立活動の関連

本校の児童生徒が教科でめざす姿に近づくためには、自立活動の指導が不可欠であることを再認識したことで、個別的教育課程（次年度の自立活動の目標）を作成する際に、生活年齢や卒業までに「身につけてほしい力」、教科を学ぶために必要な力を意識して目標設定ができる教師が増えた。

【挑む】

【知る】【描く】を踏まえ、以下の視点で平成26年度の教育課程編成を行った。

○題材の精選、学年の題材

- ・「歌唱」「器楽」「身体表現」「鑑賞」の4つの観点に分けて学年の縦のつながりが見えるように配列した。
- ・中学部の題材選定について：「歌唱」と「鑑賞」のねらいが同一になってしまう児童生徒がいるが、歌唱で発声をねらいたいときに中学校教科書の題材では目標達成が難しい場合がある。そこで、実態に応じて文部科学省著作本（☆本）などから題材を選んだ。
- ・「器楽」の捉えについて：児童生徒の実態に即して「このタイミングで音を出してほしい」とねらいをもって指導をすることも大切である。しかし、一方で音を鳴らすことだけにとらわれると、使用できる楽器や題材の幅が狭くなるので、「教師と一緒に」楽器を鳴らし、新たな音色に出会うということも大事な学びであると考え、このような器楽に関する考え方を押さえた上で、各学年の器楽で扱う題材を選定した。
- ・指導の形態について：基本的に学年集団で行う。実態差のある集団であっても、同じ題材で個々の実態に即した目標設定をして実践できることを再確認した。（同単元異目標）

○授業時数

- ・スコアの低い児童生徒にとって、1時間の音楽の時間ではなかなか評価がしづらい（Aグループの実践から）という課題が挙げられたが、今年度は、時数の検討までには至らなかった。次年度は、今年度の資料と次年度の実践を踏まえて全体で検討していきたい。

【省みる】

平成27年度、実践を継続しながら検証を行う。併せて、今年度集約した課題解決をしながら28年度の教育課程を編成する。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) <個>：個々の教師の授業実践について

知的障害特別支援学校の各教科の内容の段階のみならず、新たに学習到達度チェックリストを使って実態把握をして授業実践をしたことで、音楽の学習評価に対する教師の意識の変容が見られた。(補足資料7参照)

音楽の授業作りに関するアンケート結果には、「できている部分がスコアとして出てくるので、『もう少しでできそうなこと』を意識しながら手立てを考えられた。」「次に目指すところを授業中ずっと意識しながら指導を続けた。」「授業の中で、段階・意義を踏まえながら様子(評価)を見ようとした。」「発達の視点を落とさずに目標設定や手だてができると思った。使いこなせるかどうかは別問題だが、上に伸びるために生徒が身につけるべき力とは何かが見えることで、目標や手だてを設定しやすくなった。」など多くの教師に学習評価に対する意識の変容が見られた。

このような教師の意識の変容が見られた理由は、今まで漠然と実態を捉えていたが、学習到達度チェックリストで「スコア〇で、この発達段階にある児童生徒」であると、客観的に実態把握ができるようになったことで、目標設定が適切にできるようになったとともに、「段階・意義」を踏まえた手だてが導き出せるようになったからだと考える。

この2年間の授業実践を通して、得られた成果を以下にまとめて示す。

<「段階・意義」を踏まえた授業作り>

○目標設定、評価

- ・児童生徒の今ある段階のスコアの数値と「段階・意義」を知ることで、何をねらうかが明確になり実態に即した目標を立てるようになった。
- ・これまでにできている部分が把握できるので「もう少しでできそうなこと」を目標にすることができた。

○手だて

- ・目標が明確になることで、手だてがより具体的になった。
- ・児童生徒のスコアを把握することで、集団においても個々に応じた手だてを講じることができた。

○共通理解

- ・学習到達度チェックリストという共通のツールを活用したことで、関わる教師間で共通の関わりができるようになった。担当教師が替わっても、同じ関わりができるようになることで、視点がずれることなく評価ができるようになった。

<他教科の指導の充実>

学習到達度チェックリストを音楽の実態把握に活用することで「段階・意義」を踏まえて授業における手だてを導き出すことができるようになった。「段階・意義」を図画工作(美術)、体育(保健体育)の授業にも生かせるようになってきた。

<<例>>

スコア4：「他者への注意と反応」「注意の持続」

→・教材の提示の仕方

- ・声をかける際の距離など。

スコア6：「やりとりの予測」「パターン化」

→・通年を通して教科の時間の始まりにテーマ曲を歌う。

- ・活動の始めるときに児童生徒が次の活動を期待するような声をかける（「1、2の3」など）

＜自立活動の重要性を再認識＞

音楽の個々の目標達成に必要な力をつけるために、自立活動の指導が不可欠であることを再認識した。

＜例＞

- ・教師と一緒にばちを持って、太鼓をたたく活動ができるようになるために、、、
→座位の安定、頭部の保持、上肢の円滑な操作などの指導内容が必要。
- ・教師の合図で、歌ったり楽器を演奏したりできるようになるために、、、
→他者の意図理解、状況の理解などの指導内容が必要。
- ・音楽に気づき表情を変えられることができるようになるために、、、
→教師とのやりとり、物への気づきの促しなどの指導内容が必要。

(2) <全>：教育課程編成について

○本校の児童生徒に、卒業までに「身につけてほしい力」を整理し、授業実践を重ねてきたことで、本校在学中にどれだけのことを学んでほしいか、児童生徒の将来を見越した指導ができるようになった。そのために、教育課程はどうあるべきかという視点を持ち、教育課程を編成することができた。（指導内容、指導時数、指導体制など）

○自立活動を主とした教育課程において、音楽、図画工作（美術）、体育（保健体育）を切り口に教科指導の在り方を検討してきたことで、本校の児童生徒に教科としてつけたい力を個々の教師が意識し、授業実践、教育課程編成に携わるようになった。

○教科の学びを支えるためには、自立活動の指導の重要性を再認識したことで、個別の指導計画（次年度の自立活動の目標）を設定する際に、生活年齢や卒業までに「身につけてほしい力」、教科を学ぶために必要な力を踏まえて目標設定をできる教師が増えた。

3 今後の課題

(1) <個>：個々の教師の授業実践について

全校研究で、学習到達度チェックリストによる実態把握から指導目標及び手だての設定に至るプロセスを踏みながら授業改善を目指してきた。多くの教師が児童生徒の変容と自身の指導の手応えを感じることができた。しかし、学習到達度チェックリストをチェックして児童生徒のスコアは把握できるものの、「段階・意義」を理解することが難しいという意見も挙げられている。難しさの一因は「段階・意義」の言葉から、その段階の児童生徒をイメージすることが難しいからだと思われる。

このような課題を次年度の研究内容、研究計画に反映させていくことが重要であると考えられる。具体的には、年度当初に児童生徒の発達や学習到達度チェックリストの「段階・意義」に関する研修会を設定し、「段階・意義」をより理解できるように具体的な場面の映像を交えて共通理解を図るといった工夫が必要であると考えられる。

全教師が「段階・意義」を理解し、学習到達度チェックリストという共通のものさしで

在籍する児童生徒の実態把握ができるようになることで、さらなる授業改善を目指したい。

(2) <全>：教育課程編成について

今年度の各教師の授業実践を通して、平成26年度の教育課程編成について教科部会、学部会、学習クラス会、教育課程委員会において挙げられた課題は以下のとおりである。

- ①本校の児童生徒に「身につけてほしい力」を4つのカテゴリー（P10参照）に分けて整理し「身につけてほしい力」を踏まえて授業実践や教育課程編成を行ってきた。しかし、音楽、図画工作（美術）、体育（保健体育）は教科として設定したが、国語や算数の指導も必要ではないかという意見が挙げられた。「身につけてほしい力」の4つのカテゴリーである『楽しみ』、『人とのかかわり』、『健康・からだ』、『社会参加』をバランスよく育むためには、国語や算数も自立活動以外に意図的に育む必要はないだろうか、教科として設定しなくても指導内容として位置づける必要があるのではないか。
- ②教科等を合わせた指導「生活」の基となる教科や領域の整理が必要ではないか。
- ③多様な実態の児童生徒が在籍している現状を踏まえ、指導内容や指導の形態について見直し、教育課程の類型を整理する必要があるのではないか。

これらの課題解決に向け、どのような授業研究を切り口にして研究を進めるのか検討していきたい。併せて、今年度、研究部、教務部、自立活動部と協働して作成した「教育課程改善に向けて」の年間計画を見直して教育課程改善に臨みたい。

<参考文献>

- ・特別支援学校学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）
- ・特別支援学校学習指導要領海瀬津 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）
- ・重度・重複障害児の対人相互交渉における共同注意 コミュニケーション行動の基盤
徳永 豊 慶應義塾大学出版会株式会社
- ・実践・カリキュラムマネジメント 田村知子編著 ぎょうせい
- ・「音楽療法の視点に立った保育支援の試み」 谷村宏子 関西学院大学出版会
- ・「音楽的成長と発達～誕生から6歳まで～」ドロシー、T. マクドナルド&ジェーン、M. サイモンズ溪水社
- ・「幼児の音楽教育法」 吉富功修・三村真弓 編著 ふくろう出版

<参考資料>

- ・「重度・重複障害児における共同注意関連行動と目標設定及び学習評価のための
学習到達度チェックリストの開発」 徳永 豊 (2006)
- ・「授業における目標設定に必要な二つの視点」 福岡教育大学 一木 薫
障害のある子どもの学習評価と授業改善を考える研究会資料 (2011)
- ・「特別支援学校に『発達』をどのように取り込むか？」 北九州市立大学 田中 信利
第19回長崎県肢体不自由教育研究大会資料 (2013)
- ・教育芸術社 年間指導計画指導計画案1～6年
- ・「自閉症にみられる音楽行動の変容－乳幼児音楽行動の発達プロセススケールの作成を通して」
（「保育学研究」第48巻第1号）

補 足 資 料

- 指導内容表 補足資料 1
- 学習到達度チェックリスト 補足資料 2
- 教育課程改善に向けて～年間計画～ 補足資料 3
- 長崎特別支援学校「身につけてほしい力」と
授業作りの関連図 補足資料 4
- 個別の指導計画「身につけてほしい力」の記載例 補足資料 5
- 学習到達度チェックリスト（音楽版） 補足資料 6
- 音楽の授業作りに関するアンケート 補足資料 7
- 外部講師を招いての研修会 記録 補足資料 8

小学部 1 年「音楽」指導内容表

年間目標	
○様々な音に出会い かかわりながら、音が鳴ることに気づいたり喜びを感じたりする。 ○音や音楽を通して教師とやりとりしながら、気持ちを落ち着かせたり心躍るような体験をしたりする。	
単元名	学習指導要領の内容
みんなであわせて (1, 2, 3月)	(1) 音楽が流れている中で身体を動かして楽しむ。(小学部1段階) (2) 音の出るおもちゃで遊んだり、扱いやすい打楽器などでいろいろな音を鳴らして楽しむ。(小学部1段階)

○本単元でねらう具体的な目標

①曲を聴いたり、動物たちの絵を見たりして歌詞の世界を楽しんだり、動物の動きを模倣したりする。

②簡単なリズムにのって、みんなで動きや音、声を合わせることを楽しむ。

○身につけてほしい力

- ・見たり聞いたりする力
- ・興味関心を広げる力
- ・友だちとかかわる力
- ・身近な大人と関わる力

○関連する自立活動の内容

人間関係の形成(人や物との関係(二項～三項関係))

3. 音のする方や物を見たり、注意を向けたりすることができる。

8. 欲しい物に手を伸ばすことができる。

11. 両手に握った玩具を打ち合わせて楽しむことができる。

関連：環境の把握(感覚〈体性感覚〉) 13

16. 身近な人に声やしくさで要求をすることができる。

人間関係の形成(人や物との関係(集団活動への参加))

環境の把握(感覚〈聴覚〉)

1. 大きな音や声で目の動きや動作を止めるようにして反応する。

2. 大きな音に不快に反応する。

4. 名前を呼ばれたり話しかけたりすると反応することができる。

5. 音源が認知でき、音のする方向へ顔を向けることができる。

6. 音を出す玩具を喜ぶ。

7. 身近な人の声を聞き分けて反応することができる。

8. 静かな音に興味を示すことができる。

身体の動き(上肢の操作)

2. 目的のものに手を伸ばすことができる。

4. 手や持っているもので机や台をたたくことができる。

7. 両手を合わせて拍手ができる。

コミュニケーション(表出〈発声・発語〉)

2. 不快なときに違う泣き方や不快な表情を表すことができる。

3. 嬉しいときに快の表情を表したり、一人笑いをしたりすることができる。

4. 気に入らないと「うーうー」などの声を出して怒りを表すことができる。

○学習内容	
○「♪おんがくがはじまるよ」	・授業の始まりや共に学習する仲間を意識する。
○「♪こんこんくしゃんのうた」 (歌唱・身体表現)	・動物の絵や動きを見て模倣したり、教師と一緒に身体を動かしたりする。 ・くしゃみの音、マスクの大きさ長さなどを見たり、音から感じたりして歌詞の世界を楽しむ。
○「♪アイアイ」 (歌唱・身体表現)	・互いの声を聴きながら向かい合って交互に歌ったり、身体を動かしたりする。
○「♪とんくるりん・ばんくるりん」 (身体表現・器楽)	・あのパートは3拍子のリズムをタッピングで感じたり、手やタンバリン、カスタネットで鳴らしたりする。 ・このパートは「トーン」といいながら両手で円を描くように手を打ったり、回ったりして曲の気分の変化を感じる。
○「♪しろくまのジェンカ」 (身体表現・鑑賞)	・リズムカルな曲の感じを動きながら聴きとる。
○「卒業式の歌」「校歌」 (歌唱・鑑賞)	・卒業式の歌や校歌を繰り返し聴く。

○評価規準

・教師と一緒に身体を動かしたり、教師の動きを模倣したり、一部歌を歌ったりして、歌詞の世界を楽しむことができたか。(①)

・曲を聴いたり、リズムを感じたりして、表情を変える・身体を動かす(止める)・音を出すことができたか。(①②)

・器楽演奏をする中で、音を鳴らせたことへの気づきや自分で音を鳴らそうとする様子があったか。(②)

・リズムに合わせて手や楽器を鳴らしたり、身体を動かしたりすることができたか。(②)

徳永 豊(2006) 重度・重複障害児における共同注意関連行動と目標設定及び学習評価のための学習到達度チェックリストの開発
 ○重度・重複障害児における共同注意の障害と発達支援に関する研究(平成15年~平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) (課題番号 15530441)
<http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankobutsu/pub/f/F-138.html>
 <関連する研究> ○重度・重複障害児のコミュニケーション行動における共同注意の実証的研究
<http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kenkobutsu/pub/f/F-114.html>

学習到達度チェックリスト 2013 0820

スコア	氏名		実感把握年月日	1) 年月日 (歳 月) 評価者氏名 ()	
	生年月日	年 月 日生		2) 年月日 (歳 月) 評価者氏名 ()	
132					
120					
108					
96					
84					
72					
60					
48					
36					

24	<p>食事、着替えの部分的な自立、言葉の増加、自己主張、拒否の芽生え、ごっこ遊び、他児への興味</p>	<p>□出来事などの簡単な質問に答える □2語文の要求や指示に従う □「ワンワンはどこ？」に指さしなどで答える</p>	<p>□2語文で要求する □10以上の単語を使い話す □思いどおりにいかないとき泣く</p>	<p>□2つのシンボルからひとつを選択する □3つの絵の中から指示されて、ボールなどを指さす □複数の絵の中から自分のマークを見つめる</p>	<p>□自分マークがわかり、選んで取る □大人と一緒に形や文字をなぞる □形や直線パターンをなぞる</p>	<p>□1つと2つを区別する □指さして物を3つまで数えらる、その物を順番に指さす □「お皿にひとつずつ」ができる □わかる</p>	<p>□いつもの物が無い、いつもの場所を意図的に探す □要求に応じて大小、多少を区別する □「もっと多く、もっと少なく」がわかる</p>	<p>□要求に応じて、大小を区別する □3つの中から四角形、三角形など、同じ形の物を選ぶ □円、四角形、三角形の型はめパズルができる</p>	<p>□一人で、パンツを脱ぐ □トイレを予告する □はしを使って食べようとする</p>	<p>□毛布にもぐる □ボールを前にける □荷物を持って歩く</p>
スコア	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	数と計算	量と測定	図形	生活	運動・動作	
18	<p>意図の理解と共有、要求の明確化、見立て活動の芽生え、言語指示への応答</p>	<p>□聞いて5個ぐらいの言葉がわかる □「ズボン上げて」「尻尻いでの」指示で行動する □これからお話しがあるから、というとき聞く姿勢になる</p>	<p>□自分の要求を伝えるために「あけて」「など5語ぐらい使える □伝えようとする自発的に指さしをする □「自分でする」と要求する</p>	<p>□大人が指した方向を振り返って見る □欲しい物があると要求するように大人の顔をみることが出来る □紙を丸める</p>	<p>□積木を3つ重ねる □「ちょうだい」と言われた方にボールを返すことができる □紙を丸める</p>	<p>□「少し」と「たくさん」を区別する □「ひとつだけ」がわかる □「これをしてこうする」と2つの連続する行為を模倣する</p>	<p>□「ゆっくり歩く」「とまれ」に行動を合わせる □物を「全部出す」「全部入れる」がわかる □「もう少し」がわかる</p>	<p>□大小のものをマッチングする □物を積み上げたり、重ねたりする □3つの形から○をとる</p>	<p>□器の後追いをする □ほめられると繰り返す □スプーン等で食べようとする</p>	<p>□1〜2歩あるく □座って姿勢から立ちあがる □ぐるぐるを丸を書く</p>
12	<p>発語、言葉への応答、相互的なやりとりの拡大、ジェスチャーで選別、姿勢の保持・変換、手指の巧緻性</p>	<p>□簡単なことばを聞いて真似する □自分の名前を呼ばれると、返事を返す □言葉による簡単な要求に答える</p>	<p>□ほしい物があると「ちょうだい」と声を出す □「マ」「バ」「フ」などの発声や「ママ」「パパ」等のことばがある □欲しいものを指さして要求する</p>	<p>□大人と一緒に絵本のページをめくって見る □大人が指した方向を見る □大人の視線を追って同じ物を見る</p>	<p>□「ちょうだい」と言うとき持っている物を返す □左右斜め等になぐり描きをする* □目の前でものを隠したら、探して見つける*</p>	<p>□物を何度も繰り返して落としたり拾わせる □カップに玉を出したり入れたりする □積み木を2つ横に並べる □左右斜め等になぐり描きをする</p>	<p>□繰り返す中で形の違いを選択する □積み木を2つ横に並べる □左右斜め等になぐり描きをする</p>	<p>□コップを自分で持って上手に飲む □顔をタオル等でふくこととする □おもちゃ等を取られると不快を示す</p>	<p>□つかまえて立ったりしゃがんだりする □四つ這いやずり這いなどをする □びんのふたなど、ふたをあける</p>	
8	<p>音声や身振りによる関心かけ、物を介したやりとりの芽生え、活動と結果の理解、探索的動作</p>	<p>□名前を呼ばれると振り返ってこちらを見る □「ちょうだい」の身ぶり、物を差しだそうとする □「こっちは」と声をかけるところを見る</p>	<p>□視線や声、からだを動かしたりして、相手の注意をひく □イヤや首を振ったり拒否する □手を伸ばして、「アー」と声を出して要求する</p>	<p>□大人が積んでいる積み木をじつと見る □喜ぶとおもちゃ等を見る □絵本の中の動物等を指すとそれを見る</p>	<p>□おもちゃ等をぶつける □目の前のおもちゃに手を伸ばしてつかむ □「どうぞ」と物をおげと受け取る</p>	<p>□2つ物を赤別して別々に置く □見つけた物を指さす □2個が3個に変化したことに気づく*</p>	<p>□好きな物であれば多い方を選択する □明らか大きな変化に気づく □2個が3個に変化したことに気づく*</p>	<p>□明らかかな形の変化に気づく □ひとつの物を別の物に載せる □お座りからだの横や後ろのものをとる</p>	<p>□手さしや指さしをする □両手で物を操作する □他の人の物をほしがる</p>	<p>□ひとりて座る □物を持ちかえる □腹ばいで体を動かす</p>
6	<p>やり取りの予測、パターン化、学習による行動変化、音声や表情の模倣、注意の追従、物のやや複雑な操作、状況に合わせた自体的操作</p>	<p>□1、2、3で、3の前に期待する表情をする □「いけません」などの声で動きがとまるか、表情が変わる □アーなど簡単な音であれば真似する</p>	<p>□すでに知っていることに期待して要求する □大人の真似をして、アーウーと声を出す □顔の表情を真似する</p>	<p>□おもちゃを口に持っていきながら見る □180度、見てもを追う □おもちゃの車や転がるボールを目で追う</p>	<p>□ほしい物に手を伸ばす □顔らせるとガラガラ等を振る □顔にかけられたタオル等を取る</p>	<p>□くすぐられる直前で笑顔になる □「いないいない」で「ばあ」を期待する □2つ物を見比べて、ひとつを取る</p>	<p>□好きな物であれば多い方を選択する □明らか大きな変化に気づく □2個が3個に変化したことに気づく*</p>	<p>□明らかかな形の変化に気づく □ひとつの物を別の物に載せる □お座りからだの横や後ろのものをとる</p>	<p>□おかしなどを自分で食べる □コップから飲む □困しみと怒った顔がわかる</p>	<p>□寝返りをする □手を伸ばして物をつかむ □両手で物をつかむ</p>
4	<p>他者への注意と反応、発声、注意の持続、物の単純な操作、自体的操作</p>	<p>□あやされると笑う □声をかけられると表情で応じる □特定の声に良く反応する</p>	<p>□名前を呼ばれると応じる □アー、オー、ウーなど声を出す □親しい人やおもちゃなどに向かって、手を伸ばす □自分の手をみつめる</p>	<p>□親しい人に微笑むなど持続的に注意を集中し見る □母親や身近な人を見て、手を伸ばす □自分の手をみつめる</p>	<p>□手に触れた物をつかむ □さわられると緊張するが、予告をすると緊張しない □親しい人へ手を伸ばす</p>	<p>□動く人を追視する □くすぐられると笑顔になる □触られると押し返す</p>	<p>□動く人を追視する □くすぐられると笑顔になる □触られると押し返す</p>	<p>□スプーンから物を飲む □人に微笑みかける □あやされると声を出して笑う</p>	<p>□首がすわる □おもちゃをつかむ □物を見てそこに手を伸ばす</p>	
2	<p>外界への注意の焦点化と探索、自発運動</p>	<p>□音がすると動きを止める □音や声のする方に顔の方向を変える □声を聞いて動きを止める</p>	<p>□声を出して笑う □手をわずかに動かす □むずがるように泣く</p>	<p>□人の顔を3秒ほどじつと見る □物を3秒ほど見る □おもちゃを差し出すとそれを見る</p>	<p>□顔や手足を動かす □手が口に動く □からだをそらす</p>	<p>□音や動き、光に注意を向ける □音や光の変化で、行動が止まる □目の前の物に焦点が合うと注視をする</p>	<p>□音や動き、光に注意を向ける □音や光の変化で、行動が止まる □目の前の物に焦点が合うと注視をする</p>	<p>□顔に布などをかけられると不快を示す □ひとり笑いをする □人をじつと見る</p>	<p>□顔這いで頭をあげる □仰臥位で手や足を動かす □手をしゃぶる</p>	
1	<p>外界の刺激や活動への適応、反動的反応</p>	<p>□大きな音にびっくりする □人の声で表情が変わる</p>	<p>□声を出して泣く □突然の光や音に、飛躍して身構える*</p>	<p>□外に出るとまぶしそうに目を閉じる □明るさや色の変化に驚く*</p>	<p>□動かされることに驚く □急に抱きかかえられると身構える</p>	<p>□明るさや色の変化に驚く* □動かされることに驚く* □突然の音や光に、飛躍して身構える*</p>	<p>□明るさや色の変化に驚く* □動かされることに驚く* □突然の音や光に、飛躍して身構える*</p>	<p>□空腹の時に泣く □物や人の顔などを見る □音に動きを止める</p>	<p>□目や首を動かす □触れたら反応する □手に指を入れるとギョッと揺る</p>	
スコア	段階、意義	受け止め、対応	表現、要求	見ること	操作	外界の知覚認知		生活	運動・動作	
		*は重複項目		国語		算数				

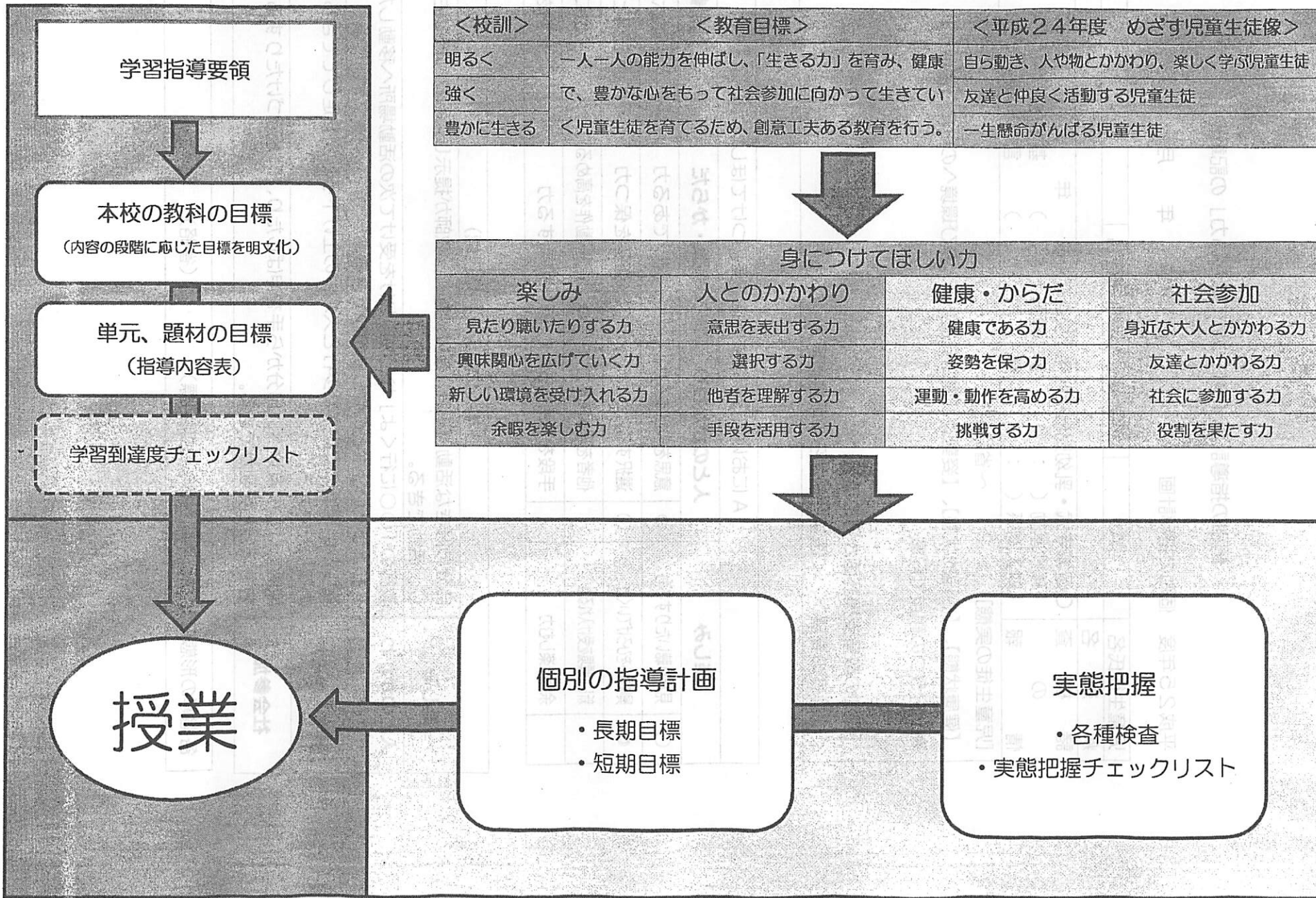
* 小学校1年から6年の算数の標準内容は、以下から引用した、八潮市立八條北小学校:16・16年度文部科学省愛護の学力向上フロンティア事業、16・17年度は埼玉県指定学力向上プログラム事業、<http://www.yashio-kitasho-eLed.jp/gelyou.htm>
* 小学校1年から6年の国語の標準内容は、国立教育政策研究所「評価標準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料、一評価標準、評価方法等の研究開発(報告一)」から引用した。

～教育課程改善にむけて～ 年間計画

	研究部◎：全体研究、②：グループ研究	各教師（日々の教育活動）	教務部	自立活動部
3	○次年度の研究計画作成	○個別、指導要録提出	○個別の指導計画・指導要録チェック ○次年度の諸準備	
4	○研究推進委員会	○新旧担任引き継ぎ		○新転任者オリエンテーション ○専門研修①「自立活動、ヒヤリハット事例について」
5	◎H25研究方針等の説明 ・身につけてほしい力、学習到達度チェックリストについて ◎音楽の目標設定及び手だての検討	○実態把握チェックリスト、学習到達度チェックリスト（国、算、音）の実施 ○目標設定と共有 ・年間目標設定とクラス内での共有	・「個別の指導計画」作成の手順説明会	○専門研修②「子どもの課題の味方について」
6	◎研究授業①（小4組、音楽） 音楽の目標設定、手だてについて ◎音楽の目標設定及び手だての検討	○「個別の指導計画」確認会 ・新年度の目標・学習内容検討 ・遠城寺の実施 ・個別の教育支援計画作成	○「個別の指導計画」確認会 ・新年度の目標・学習内容検討	○「個別の指導計画」確認会 ・新年度の目標・学習内容検討 ○自立活動評価シート作成
7		・通知表作成、提出 ○個別の指導計画提出 ・フェイスシート作成（身につけてほしい力の設定）併せて1学期評価も記載 ◎個別の指導計画の教科の目標設定と評価	○個別の指導計画チェック ・1学期評価を集約して課題等の整理 ○週案より指導形態ごとの時数分析	○専門研修③「摂食指導について」
8	◎徳永先生研修会 ・学習到達度チェックリストについて ◎個別の指導計画の教科の目標設定と評価 ◎事例研究発表（一木先生来校） 音楽の目標設定、手だてについて	・日々の授業実践 ・2学期に向けての指導の共通理解	○教科部会① ・1学期の振り返りと教育課程編成に向けて ○教育課程委員会①（編成方針、昨年度からの課題から編成における重点課題の検討、編成スケジュール）	
9	◎個別の指導計画の教科の目標設定と評価	・日々の授業実践	○教育課程委員会②（学校教育目標、学部目標、重点課題に対する各学部検討結果の審議）	○専門研修④「呼吸・排痰について」
10	◎研究授業②（中学部 音楽） 音楽の目標設定、手だて、評価 ◎事例研究発表（訪問教育）		○教育課程委員会③（各指導の形態の時数検討、時間割の検討）	
11	◎事例研究発表 ○「音楽の授業作りについてのアンマート」実施		○教育課程委員会④（教育課程の類型確認、年間行事予定）	○専門研修⑤「感覚統合について」 ○自立活動評価シート作成
12	◎研究の反省と今後に向けて	○教育課程、個別の指導計画検討会 ・次年度の目標・学習内容検討 ○通知表作成、提出 ○個別指導計画評価提出	○教育課程、個別の指導計画検討会 ・次年度の目標・学習内容検討 ○教科部会② ○教育課程委員会⑤（前回までの積み残し課題、次年度の体制と教室使用） ○教育課程委員会⑥：職員全体会（委員会での決定事項の確認等）	○教育課程、個別の指導計画検討会 ・次年度の目標・学習内容検討
1	◎研究の反省と今後に向けて ・研究集録作成 ○一木先生来校 ・今後の研究について	○各教科の教育課程作成		
2	◎研究のまとめ	○個別の教育支援計画提出	教育課程表印刷、製本、県教委提出	○自立活動評価シート作成
3	○研究推進委員会 ・次年度の研究について提案	○個別評価、指導要録提出	○個別の指導計画チェック ・評価等記載事項を分析して次年度の作成マニュアルの改善材料にする	

長崎特別支援学校 「身につけてほしい力」と授業作りの関連図

目録資料



学年	氏名	実態把握月日		1) 年 月 日 (歳 ヶ月) 評価者氏名 ()	
	生年 月日	年 月 日 生 (歳 ヶ月)	男 女	2) 年 月 日 (歳 ヶ月) 評価者氏名 ()	
132	抽象的思考と自己理解からの集団意識の芽生え	言葉のまとまりや語感、重なり合う旋律の特徴を生かしながら、響きのある声で合唱をする	旋律の重なりや掛け合いなどから自分のパートの役割を意識し、楽曲のよさを生かした表現の仕方を工夫している	旋律の特徴や歌詞から曲想を感じ取って演奏の仕方を工夫したり、つくったリズムの組み合わせ方や強弱について見通しをもって工夫したりしている	主な旋律の反復や変化、さまざまな音色の重なり合う響きなどが一体となってつくり出している曲想を味わって聴いている
120		和音の響きやその移り変わりの美しさを感じ取って、友達の声や音と調和させて合唱をする	歌詞の表す気持ちを読み取って自分の思いをもつなどして、友達とともに協力して表現を工夫する	旋律の特徴やフレーズを生かして強弱や速度を工夫したり声や音の美しい響き合いを求めて演奏を工夫したりする	いろいろな楽器の音が重なり合う響きの違いや、曲想とその変化などの特徴を感じ取って聴いている
108	体験や具体物を活用した思考や理解の深まり	友達の歌声や互いの旋律を聴きながら、自分の声を合わせて合唱をする	拍子の違いによる曲想を感じ取って、体を動かしながら音楽を聴いたり、歌や楽器で表現したりする	リコーダーやサミングの仕方に関心をもち、息の強さやタンギング、高音域の音の出し方に気をつけて、きれいな音色で演奏している	旋律の重なりや掛け合いが生み出す響きのおもしろさや美しさを感じ取りながら、楽曲の構造に気をつけて聴いている
96		友達の歌声や楽器の音を聴き、自分の声や音を合わせながら、拍の流れによって歌ったりする	拍の流れによって体を動かしたり、二重唱の声の重なりや掛け合いの部分のおもしろさを感じ取ったりしながら聴いている	リコーダーの基本的な演奏の仕方を身につけ、タンギングや息の強さに気をつけて、きれいな音色で演奏している	旋律の音の動きや速度の変化などを聴き取り、曲想とその変化や、想像した情景を言葉で表すなどして楽曲のよさを味わって聴いている
84	学習態度の安定と理解の広がり	自分の歌声や発声に気をつけて歌ったり、友達の歌声や伴奏を聴きながら自分の声を合わせて歌ったりする	音の高さの違いに気をつけて聴き、音楽に合わせて体を動かすなどして、楽曲の楽しさに気づいて聴いている	音の高さの違いに気をつけて旋律や階名を歌詞で歌ったり、音色に気をつけて鍵盤楽器を演奏したりしている	強弱や旋律の反復など楽曲の特徴から、想像したことや気づいたことを言葉で表して、楽曲の楽しさに気づいて聴く
72	学校生活習慣と学習態度の形成	歌詞の表す情景や気持ち、楽曲の気分に合った表現で歌ったり、自分の歌声や発音に気をつけて歌ったりする	友達と声をそろえて歌ったり、音楽に合わせて体を動かしたりしている	旋律を階名で模唱や暗唱をしたり、ド～ソの5つの音の位置を覚えて、鍵盤ハーモニカで演奏したりしている	旋律や強弱などに気をつけて聴き、楽曲の気分を感じ取ったり、場面の様子を想像したりしながら、楽曲の楽しさに気づいて聴いている
60	予測や見通しをもって行動、役割を意識した協同遊び、自然や文字などへの興味	□2番や3番がある長い曲でも歌詞を間違えずに歌う □交互合唱ができる □声をそろえて歌うことができる	□曲のリズム、強弱、速度を聞き分けて身体を動かすことができる □簡単なフォークダンスができる □曲の特徴を捉えてふさわしい動きをする	□階名や鍵盤の位置がおおよそ分かる □4分音符、8分音符を叩く □簡単な旋律楽器の分担演奏や合奏ができる	□（静かな曲のときは静かに、リズムカルな曲のときにはリズムカルに聴く） □（教師の）範唱では、斉唱から二部合唱になる際の歌声に気づき注意深く聴く □曲を繰り返し聴くことで曲のクライマックスが分かる
48	物の特性の理解と目的をもった遊びや行動、決まりへの気づき、感情の調整	□少し長い曲でも歌詞を間違えずに歌う □音が外れても旋律はおおよそ正しく歌う □気に入った言葉で替え歌を歌う	□音に合わせて両手を交互に握ったり開いたりするなど細かな身体動きの制御ができる □友達と違う振りをして身体を動かすことができる □聞こえてきた音楽のリズムに合わせてよとする。	□教師や友だちと交互に演奏する □リズム楽器を叩きながら歩く □速く、大きくなどの簡単な指示にこたえる	□輪唱の部分に気づき、その特徴を言葉で表現する □曲調に合わせて緩やかな曲では静かに聴いたり、テンポのよい曲では発声をしたりしながら聴く
36	身辺自立、質問の増加、友達との関わり増加（平行遊び）	□短い曲であれば歌詞を間違わずに歌う □自分の出しやすい声の高さで歌う □お気に入りの曲を何度も繰り返して歌う	□動物や乗り物の模倣ができる □手をたたいたり、足を踏み鳴らしたりする。4拍子のパターンをまねする。 □手遊び歌に合わせた、動きをする。	□リズムが安定してくる □楽器の取り扱い方や鳴らし方が分かる □友だちと合わせたり、一緒にしたりする	□音のリズムや歌詞の内容に反応して聴いたりする □楽器の音色を聞き分けながら聴く
24	食事、着替えの部分的身辺自立、言葉の増加、自己主張と拒否の明確化、ごっこ遊び、他児への興味	□発音は不明瞭であるが、フレーズを口ずさむ □音程を意識して歌おうとする □即興歌が出る	□模倣で両腕をふるなどの活発な動き、早く、ゆっくりの動きができる □身体の中での鼻や口、肩といった細かな部位を示すことができる □歌いながら、身体を動かす。	□簡単なリズムを叩くことができる □旋律楽器において、目印をたよりに指一本で押して鳴らす □楽器を持つ、演奏を始めるなど簡単な指示を理解する	□特定の楽器の音を聞き分ける □見えないところでなった楽器の音を特定しながら聴く

		歌 唱	身体表現	器 楽	鑑 賞
18	意図の理解と共有、自己主張・拒否の芽生え、見立て活動の芽生え、言語指示への応答	<input type="checkbox"/> 歌詞の一部覚えて、一緒に歌おうとする <input type="checkbox"/> リズムに合わせて声を出ることができる <input type="checkbox"/> 「ゆっくり」「はやく」に模倣して歌う	<input type="checkbox"/> 音楽が流れる中で曲に合わせて、歩いたり走ったりすることができる <input type="checkbox"/> 曲の一部に合わせて自分なりのリズムで手をたたく <input type="checkbox"/> 「ゆっくり」「はやく」に行動を合わせる	<input type="checkbox"/> ラッパや鍵盤ハーモニカを吹きながら押して鳴らす <input type="checkbox"/> 曲を聴きながら楽器を鳴らす <input type="checkbox"/> 様々な楽器に応じた鳴らし方が分かる	<input type="checkbox"/> 自分の興味のある曲や気に入った曲があるとじっくりと聴く <input type="checkbox"/> 音楽を聴くように促すと聴く姿勢になる
12	発語、言葉への応答、相互的なやりとりの拡大、ジェスチャーで選択、姿勢の保持・変換、手指の巧緻性	<input type="checkbox"/> 何度が聞くと、歌の一部を真似て歌うことがある <input type="checkbox"/> 少しだけだが、大人と声を合わせて歌う <input type="checkbox"/> 「マ」「バ」「パ」「ブ」などの発声や「ママ」「パパ」等のことばがある	<input type="checkbox"/> 簡単な曲を聴きながら、パチパチと身体の前で手を合わせてたたくことができる <input type="checkbox"/> 曲を聞いて、身体の一部だけを合わせて動かす <input type="checkbox"/> 曲の終わりに合わせて、動きを止めることができる。	<input type="checkbox"/> 援助を受け、笛やラッパなどを吹いて鳴らす <input type="checkbox"/> 援助を受け、タンブリンを持って叩いて鳴らす <input type="checkbox"/> 試行錯誤しながら、勝手気ままに自由に音を出す	<input type="checkbox"/> 読み聞かせを聴きながら、台詞の抑揚や擬音語などを楽しむ <input type="checkbox"/> 言葉による簡単な要求に応じて、音楽を聴く
8	音声や身振りによる働きかけ、物を介したやりとりの芽生え、活動と結果の理解、探索的操作	<input type="checkbox"/> 喃語を組み合わせて歌らしきものを歌う <input type="checkbox"/> 他人の注意を引くために意図的に声を出す <input type="checkbox"/> 機嫌よく声を出しているとき真似てやると、それを真似て声を出す	<input type="checkbox"/> 特定の曲を覚えて身体を動かす <input type="checkbox"/> 新規な音で、音源を捜す行動をする <input type="checkbox"/> 気に入った音楽が流れると、繰り返し身体を動かす。	<input type="checkbox"/> パチを持たせると援助されて叩く <input type="checkbox"/> 卓上ピアノやキーボードを押して鳴らす <input type="checkbox"/> 短い間であれば集中して、楽器を叩く、鳴らす	<input type="checkbox"/> 特定の曲の一部を覚え、好きな部分では笑顔になる <input type="checkbox"/> 好きな楽器の音に耳を傾けて聴く <input type="checkbox"/> 曲や楽器などの音が鳴ると気づく
6	やり取りの予測、パターン化、学習による行動変化、音声や表情の模倣、注意の追従、物のやや複雑な操作、状況に合わせた自体の操作	<input type="checkbox"/> 大人の真似をしてアウーと声を出す <input type="checkbox"/> 喃語が頻繁に出る <input type="checkbox"/> 「マンマンマン」のように反復する鼻にかかったような声を出す	<input type="checkbox"/> 気に入った音楽が流れたときに、手をたたく <input type="checkbox"/> 身近な大人と一緒に興味を示した音の場所を探そうとする。 <input type="checkbox"/> 音に合わせて、全身で動く、寝返りをする	<input type="checkbox"/> 楽器を見て、手を伸ばす <input type="checkbox"/> 楽器を少しの間は持っている <input type="checkbox"/> 両手で物をつかむ	<input type="checkbox"/> 好きな曲と嫌いな曲がある <input type="checkbox"/> 好きな曲があり、リラックスして耳を傾ける <input type="checkbox"/> 繰り返し聴いた曲であれば、次を期待する
4	他者への注意と反応、発声、注意の持続、物の単純な操作、自体の操作	<input type="checkbox"/> 親しい人やおもちゃなどに向かって声を出す <input type="checkbox"/> 好きな音を聞くと声を出す <input type="checkbox"/> 機嫌のよいときに、アー、オー、ウーと声を出す（母音）	<input type="checkbox"/> 気に入った音楽が流れたとき前後や左右に身体を揺する。 <input type="checkbox"/> 音の出る方向に顔を向けようとする。 <input type="checkbox"/> 身近な大人と一緒に身体を動かすことを受け入れる <input type="checkbox"/> 特定の音に対して身体を動かす	<input type="checkbox"/> 音の出るおもちゃを好んで持ったり触れたりする <input type="checkbox"/> 少しの間であれば触ったり、握ったりする <input type="checkbox"/> 援助を受け入れ楽器に触れる	<input type="checkbox"/> 好きな音があり、その音が聴こえると笑顔になる <input type="checkbox"/> 心地よい音と不快な音に反応する <input type="checkbox"/> 特定の歌声にはよく耳を傾けている
2	外界への注意の焦点化と探索、自発運動	<input type="checkbox"/> 声を出して笑う <input type="checkbox"/> むずがるような泣き方をする <input type="checkbox"/> 「アッアッ」「エッエッ」「アウー」などの声を出す	<input type="checkbox"/> 手をわずかに動かす <input type="checkbox"/> 手足を動かす <input type="checkbox"/> 頭を動かす	<input type="checkbox"/> 目の前の太鼓や木琴を見る <input type="checkbox"/> 楽器を差し出すとそれを見る <input type="checkbox"/> 楽器など音源のある方向に顔や視線を向ける	<input type="checkbox"/> 歌や音楽を聴くと目を開いたり、表情を変えたりする <input type="checkbox"/> 近くで鳴らした楽器の音や歌に反応する
1	外界の刺激や活動への遭遇、反射的反應		<input type="checkbox"/> 眠っていて突然の音に泣き出す <input type="checkbox"/> 大きな音を聞いたときに身体に力が入る	<input type="checkbox"/> 規則的なリズムで泣く <input type="checkbox"/> 大きな音に驚き、顔をこわばらせる	
スコア	段階、意義	うたう	音に合わせてうごく	かなでる	間く・聴く
		音 楽			

音楽の授業作りに関するアンケート

① 学習到達度チェックリスト（音楽版）は授業作りに役立ちましたか。

ア：とてもそう思う 23% イ：まあそう思う 32%
ウ：そう思う 32% エ：あまり思わない 13%

② 各スコアの段階、意義をふまえた目標や手だての設定ができましたか。

ア：とてもそう思う 4% イ：まあそう思う 35%
ウ：そう思う 48% エ：あまり思わない 13%

③ ②でア、イ、ウと答えた教師のコメント

○児童のねらう姿、課題を達成するために必要とする周辺の課題が段階・意義より導き出せたので手だてを考えるとときに参考になった。

○例えば、音楽劇の「おむすびころりん」スコア18に見立て活動の芽生えがある。この段階にある児童においては、自分がおじいさんになって演じる、指さされたものを見る（共同注意）取ってくださいの指示に従うというところを目標とした。スコア6程度の段階にある児童も多いので、同じ曲を繰り返す、場面のパターン化をはかりやりとりを予測できるよう配慮した。

○音楽の時間で今何を教えるのかが明確になった。児童の発達段階に応じ、どんなことをねらっていくのか、どういう関わり方がいいのか、ということを知ることができたことで高すぎる目標ではなくなった。手立てが具体的になった。「段階・意義を踏まえた設定」のやり方が今年分かったと思う。まだ十分に理解したとまではいかないと思うので、今後も続けて活用し理解を深めていきたい。

○チェックしたところが子どもの実態であり、目標となることであることを確認できた。また、手だてを考える（見直す）ときに参考になった。

○特に手だてには生かしやすいと思う。例えば、小1（7名）は平均スコア4の集団である。授業の流れをシンプルに繰り返し行うことを基本として、スコアの高い子どもにはピンポイントで予測や注意の持続が必要となるねらいどころを入れていく。反対にスコアが1～2の子どもには1つの曲の導入時や楽器提示の際に「音（外界）への気づき」「反射的反應」をねらっていくようにした。

○これまでできている部分がスコアとして出てくるので、「もう少しでできそうなこと」を目標にすえることでそれに対する手立てが考えられた。

○音楽だけでなく日々の活動全てで継続して取り組んだように思う。

○次にめざすところを授業中ずっと意識しながら指導を続けたように思う。

○授業の中で、段階・意義を踏まえながら様子（評価）を見ようとした。

○今どのくらいの発達段階にいるのかを把握することで簡単すぎず難しすぎずの目標を立てたりどの程度の援助が必要なのかを判断できたりしたように思う。

○発達初期の子どもに関して、段階・意義を理解し手だてを考えたが集団学習のためじっくり観察し指導に生かすことができた。1対1で行う自立活動などの学習とつなげてじっくりと取り組むことが必要と思う。

○児童一人一人の段階・意義を理解して個々の楽器選びを考えることができた。

○発達の視点を落とさずに目標設定や手だてができると思った。使いこなせるかどうかは別問題だが、上に伸びるために生徒が身につける力の何かが見えることで目標や手だては設定しやすくなった。

外部講師を招いての研修会 記録

期日：平成25年8月27日 指導助言者 福岡教育大学 一木 薫先生

内容：(1) 1学期の研究の振り返り（事前アンケート意見集約）

(2) Aグループ事例発表、協議

(3) 指導助言

(4) 2学期の目標確認会

ここには、(3) 指導助言のみ記載している。

※1学期の振り返りに対するコメント ○印：本校教師による1学期研究に対するコメント

○チェックリストの内容によっては○がつかない、目標設定に生かしくい内容のまとまりがある。

→子どもの中にアンバランスを見てとれる手がかりになる。見るのが難しい、ではどの部分には○がつくのか？持てる力をチェックリストの段階・意義で確認すると、手がかりを得ることができる。通常の教科ではどうだろう、難しさがあるから指導しないということはない。段階・意義を踏まえて「学習の機会」として自分で演奏するのは難しいが器楽も取り入れると考える必要がある。

○音楽に「興味や関心をもち」「楽しむ」

→子どものそのような姿、表情の違いなどを先生方は共有できていると思う。その「手がかり」を文章表記できれば良いと思う。

○教科と自立活動の目標が似てくる

→自立活動の評価はできても、音楽の評価が難しい、この評価の迷いの理由は何だろう。おそらく授業時数ではないか。週1時間の音楽の中で感じ取れた手応えや学習評価を次年度の教育課程検討へ生かせればと思う。例えば、1週間1日10分の音楽を実施するというのもありだと思ふ。確かな伸びを出していただければと思う。

何のために学習到達度チェックリストを活用するのか？

- ・ 人との交わりを育む適切な指導を実現するために
 - 発達段階を的確に把握するツール
(教科ex.1段階「楽しむ」でも自立活動でも)
- ・ 公教育として文化遺産との交わりを保障するために
 - 知的教科を補うツール
(音楽版作成自体が目的ではない。なくても各先生が「段階・意義」をふまえた目標を適切に設定し、お互いに共有できれば。)

○何のために学習到達度チェックリストを活用するのか。

→「楽しむ」ために外界に気づいて受け止める、関わる教師との関係が成立しないと評価ができない。子どもが外界を受け止めて初めて「楽しさ」を味わうことができるのではないのか。それは、教科も自立活動も同じである。どんなふうに子どもに外界を理解してもらうのかその視点を抜きにして学びは成立しない。子どもの実態に応じて関わり方の工夫をする。だから、段階・意義の把握をすることが大切である。

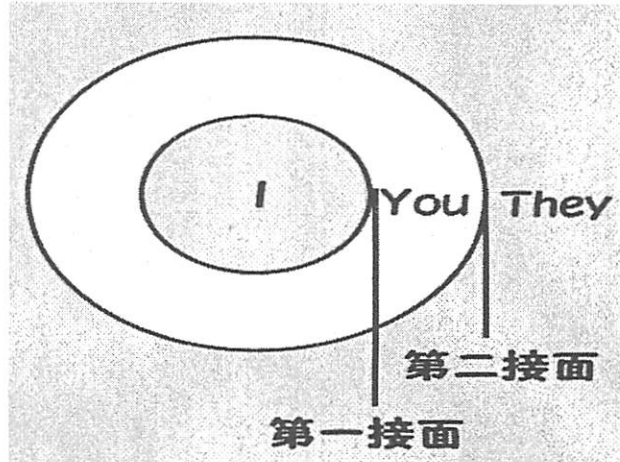
○学習到達度チェックリスト（音楽版）を作成することが目的ではない。

→発達初期段階における発達のプロセスを・・・

すべての先生が段階・意義の意味するところを学習到達度チェックリスト（国・算）だけで理解するのに難しさがある。だからその音楽版を参考として作成し、段階・意義の理解を深めようとしているのであり、表を作成すること自体が目的ではない。

二つのドーナツ論

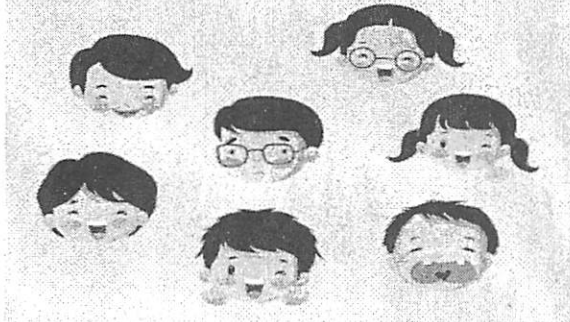
学び手(I)が外界(They世界: 現実の社会・文化的実践の場)の認識を広げ、深めていくときに、必然的に二人称的世界(You世界)との関わりを経由するとしたもの。学校での<学び=教え>を健全に育てるためには、二人称的他者(=教師)、二人称的道具(=教材)に関して、それぞれの接面が適切に構成されているかが重要な鍵になる。



佐伯・『「学ぶ」ということの意味』(1995)岩波書店

教科と自立活動

- ・ 長崎特別支援学校の子どもたちに交わりを保障するTheyの世界



- ・ 学校として保障するTheyの世界と交わるために前提として不可欠な力を培う必要のある子どもに個別に指導



そのためにも教師間で共有するものさしに照らした
目標設定と学習評価が不可欠

おわりに

本校では、平成21年度から3か年の計画で全校研究と教育課程委員会が連携し、教育課程の改善に取り組んできました。その成果をまとめた研究報告書『新学習指導要領に対応した指導をめざして ～自立活動を主とする教育課程における教科の実践について～』を、平成23年2月の研究発表会において発表しました。そこでは、「教科の指導内容表」の作成や「身につけてほしい力」の集約など一定の成果を上げることができましたが、一方では新たな課題も見つかりました。そのため、平成24年度から2か年の計画で、「教育課程の改善」を柱とした研究を継続してきました。1年後、中間報告として研究集録をまとめ、更に本年は本報告書をまとめ、「学習到達度チェックリストによる実態把握から指導目標及び手だての設定に至るプロセス」による授業実践に取り組んだ結果を発表することができました。

このプロセスの授業での実践は、重度・重複障害児教育に携わる教師だけでなく児童生徒にとっても大きな一歩だと思っています。学校教育の成果は教師の裁量と力量に負うところが大きく、「良い先生」か「悪い先生」のどちらかに指導を受けるかが児童生徒の「幸」か「不幸」につながると言われています。このプロセスを活用することは、経験の浅い先生でもベテランの先生でも全ての先生が、教師個人の勘や経験に頼らない良質の授業を児童生徒へ提供できる可能性があると考えます。現段階では、本校内での限られた事例を元に開発したプロセスですが、多くの学校がチェックリストやこのプロセスを試み、その結果を共有することで、より精度の高いチェックリストやプロセスに進化させることができると考えます。せっかくですから、この報告書を御一読いただいたことを縁に、「学習到達度チェックリストによる実態把握から指導目標及び手だての設定に至るプロセス」を実践し、結果を共有したいと願っております。

本報告書を出稿するにあたり、真摯に研究に向かい合ってきた全ての先生方と研究をリードしてきた研究部の先生方に敬意を表します。また、この一連の研究では、「教科の指導内容表」や「学習到達度チェックリスト」の作成など具体的な成果物も残りました。しかし、それ以上の成果は、研究に携わった先生方の意識の変化と教育力の向上です。児童生徒の実態把握のための観察力、指導計画を立てる企画力、実際の授業を行う指導力など確実に先生方一人一人にも教育を実践する力が備わってきました。これからも先生方には、自己研鑽に励んでいただきたいと願っています。

最後に、本校の研究に甚大なお力添えをいただきました福岡大学文学部教授 徳永 豊先生 並びに福岡教育大学特別支援教育講座准教授 一木 薫先生をはじめ、多くの皆様の御指導、御助言に感謝し、今後も引き続き御指導いただきますことをお願いし、御挨拶といたします。

平成26年2月

長崎県立長崎特別支援学校 教頭 森 久之

研究同人

【学校長】 峯 信幸

【教頭】 森 久之

<小学部>

石本 祐子(主事)	峰平 真理子
松尾 恵子	島田 千賀子
久松 寿子	相良 知恵子
野田 成実	大津 智恵
窄口 ひとみ	寺田 佳子
立岡 里香	古香 祐美
平子 欽也	苑田 慶子
東濱 明子	伊藤 里沙
亀田 雅宏	菅原 仁志
大町 美緒	玉村 裕子
吉村 英治	下田 陽介
山口 美代子	

<中学部>

伊東 健史(主事)
村山 多江
山田 豊美香
松本 雄平
大和 憲幸
本多 克敏

<訪問教育>

金子 尚美
俣野 真由美
山口 由美
坂上 有貴子
船場 加寿美
肥沼 健一

《共同研究者》

徳永 豊(福岡大学人文学部 教授)

一木 薫(福岡教育大学特別支援教育講座 准教授)

《平成24年度研究同人》

松尾 万喜	鶴 宣彦
岡本 由美	田川 美佳
荒濱 智子	竹添 公太
吉次 ゆりえ	貝本 智和
吉田 治子	